麗澤大学大学院
平成１７年度　修　士　論　文

閩南人と客家人の文化比較から見た台湾社会―清朝の閩客「分類械闘」から

言語教育研究課　　比較文明文化専攻

指導教員　　欠端　實　教授

学籍番号　1042120073　　荘　文曲

論文の完成年月　　２００６年３月

「本論文係接受行政院客家委員會獎助完成」

指導教授　：　欠端　實 _____

閩南人と客家人の文化比較から見た台湾社会―清朝の閩客分類械鬪から

目次

序論

第１節　　問題意識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第２節　　先行研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第３節　　研究方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

本論

第一章　：　閩南人と客家人　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　第１節　四波にわたる閩南人と客家人の台湾移住　・・・・・・４
　　（１）第一波　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　　（２）第二波　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　　（３）第三波　移民に黄金時代　・・・・・・・・・・・・・・６
　　（４）第四波　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　第２節　閩南人とその文化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
　　（１）言語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
　　（２）宗教信仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
　　（３）伝統音楽―歌仔戯　・・・・・・・・・・・・・・・・・９
　　（４）食　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
　第３節　客家人とその文化　・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　　（１）耕讀伝家　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　　（２）宗教信仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
　　（３）義民の信仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
　　（４）伝統音楽―客家山歌　・・・・・・・・・・・・・・・１６
　　（５）食―独特風味の食文化　・・・・・・・・・・・・・・１８
　　（６）言語文化の宝石―客家語　・・・・・・・・・・・・・２０
　第４節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

第二章　：　閩客の分類械鬪　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
　第１節　分類械鬪　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３

第２節　政治的な原因　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
（１）消極的な清政府　・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
（２）無能官吏たちの姿　・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
（３）政治的な分類械闘の例　・・・・・・・・・・・・・・・２８
（４）六堆　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
（５）政治における影響　・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
第３節　経済的な原因　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
（１）経済的な分類械闘の例　・・・・・・・・・・・・・・・３０
（２）経済における影響　・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
第４節　社会的な原因　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２
（１）女性が少ない社会の気風　・・・・・・・・・・・・・・３２
（２）社会的な分類械闘の例　・・・・・・・・・・・・・・・３４
（３）社会における影響　・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
第５節　文化的な原因　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
（１）文化における影響　・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
第６節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８

第三章　：　閩客の現状と意識現状　・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
第１節　閩南人と客家人の現状　・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
（１）文学から見た閩客の現状　・・・・・・・・・・・・・・・・４１
（２）映画から見た閩客の現状　・・・・・・・・・・・・・・・・４３
１）客家の監督　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
２）閩南の監督　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
第２節　閩客双方に現れた意識の現状　・・・・・・・・・・・・・・４４
（１）ヒアリング記録の抜粋　・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
第３節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７

終章　：　結論と今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
第１節　結論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
（１）多様性の台湾民族とその歴史　・・・・・・・・・・・・・５０
第２節　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３

付録
（付録１）　清代の分類械闘一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・５７
（付録２）　分類械闘発生地一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・５９
（付録３）　分類械闘統計表（１０年単位）　・・・・・・・・・・・６０
（付録４）　台湾人口の推移　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０

注　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１

参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６４

序論

第１節　問題意識

台湾にはさまざまな言語、文化をもった複数の民族集団が暮らしている。本省人、外省人、先住民に分けられる。本省人はさらに閩南人、客家人に分けられる。これらのグループの人口比は閩南人（７４．５％）、客家人（１３．２％）、外省人（９．９％）、先住民（２．４％）となっている。

３００年にわたる台湾の歴史は、その大部分が閩南人、客家人によって作られたといっても過言ではない。人口比から見ても、閩南人と客家人が一致協力しあうことができれば、台湾社会を牽引していく大きな力を発揮することは間違いない。しかし、この二つのグループが描いてきた歴史的軌跡は決して平和なものでもなく平坦なものでもなかった。排斥や迫害、反目や闘争が塗り込められた歴史であった。同じ台湾の地に暮らしながら、この二つのグループはなぜ反目しあうのであろうか。その原因はどこにあるのであろうか。将来、二つのグループがともに手を携えて歩むためにはどのようにすればよいのであろうか。

そのようなことを頻りに考えていた私は、修士論文で、台湾における閩南人と客家人について、文化的観点から、両者を比較研究することとした。

二つのグループ間の確執を象徴的に示しているのが「分類械闘」である。分類械闘がなぜ、どのようにして発生したのか。その原因や歴史的背景を解明してみたいと思う。もしその原因、歴史的背景を解明することができるならば、分類械闘を生み出した過去の政治的・経済的・社会・文化的環境と、今日の台湾の状況と比較することによって、二つのグループ間に存在してきたさまざまな問題を解決する方途も、自ら見出せるのではないかと考えている。そして、現在から将来への問題として、二つのグループが歴史的軋轢を克服して共存しあっていけるようにするためには、今後我々が何に向かって努力を傾けていけばよいのか、明らかにできればと願っている。

修士論文の研究の段階を終えて後、続けて博士課程で比較文明文化の立場から、台湾社会の成立過程と分類械闘の研究をしたいと思う。

第２節　先行研究

史上初めて台湾を主体とした系統的台湾史研究としては、史明の『台湾人四百年史』と王育徳の『台湾―苦悶の歴史』をあげなければならない。ともに１９６０年代、日本で日本語によって出版された。唯物史観の立場に立つ史明は、分類械闘の原因を支配者の分裂政策にもとづくものとしている。このように開拓民同士が骨肉相喰み、政府が匪徒と義民の名目をあたえて分裂を策するとき、

義民とされた方が、往々にして権力と結託しては放火殺人や脅迫強奪をほしいままにし、開拓民同士から憎悪されたものであった。「その名は義民でも、匪徒より悪虐なり」、といわれてきたのがそれである。また、明治大学教授であった王育徳は分類械闘について、以下のように述べている。清朝の清官は、分類械闘を鎮圧する力をもたなかった。分類械闘が官に対する反乱に発展するのを警戒するだけであった。実際、分類械闘が反乱に発展するケースは、極めて多かった。ワイロをもらった清官が、一方に加担するからである。しかし、反乱になれば、清官は公然と「義民」を募って当たらせた。反乱軍が閩南系のときは、義民は客家人であり、閩南系の漳州人のときは、義民は閩南系の泉州人もしくは客家人であり、移住民混合軍のときは、義民は高砂族（先住民）であった。義民の本質は奉公にかこつけて、私利を計る対立者であったといって過言でない。上記二つの著作は、今日の台湾史研究の動向に影響を与えたものの、その内容が学術的論文というよりもむしろ政治的宣伝の色彩が濃厚であったために、あまり、普及しなかった。

日本人による台湾史研究としては、第一に伊能嘉矩をあげなければならない。かれは近代日本の台湾研究の先駆者であった。彼は１０年の歳月を費やして、台湾において実地調査と史料の収集を行った。島内の先住民・漢民族移住民を問わず、日本殖民地時代以前の台湾社会の文化と風習を研究し、内容の濃い大著を残した。最も有名なのは『台湾文化史』全３巻である。彼は分類械闘をもっとも早くシステマティックに捉え、その原因を生存の必要性、土地の争奪をめぐる衝突に基づくとした。

このほか東嘉生、中村哲、宋明哲、平山勲等の研究がある。東は、分類械闘の原因で土地をめぐる競争に求めている。風俗、習慣、言語等の差異は原因の一つには違いないが、重要なのは封建的土地所有のもとでの生産関係であるとしている。中村は分類械闘の本質は異族感情に基づく対立・反抗であるとしている。例えば同族のある人が他族から危害をうけるとき、他族全員に敵対することとなり報復が行われる。「血の報復」という観念である。平山は社会に発生した多くの「游民」（羅漢脚）こそが分類械闘の原因であるとしている。

文献的研究としては中国法制史研究者の仁井田陞による研究がある。彼によって中国本土における械闘に関する資料が収集されている。

第３節　研究方法

まず先行研究に基づいて、過去３００年間の閩南人と客家人の歴史を調べ、その上で、特に分類械闘の政治的、経済的、社会的、文化的原因をあきらかにしたい。

つぎに閩南、客家に対する現在の台湾人の意識を探るために、文学作品、映

画をとりあげたい。文学作品や映画の中で、閩南人、客家人がどのように見られているのか、また両者の関係が将来どうあるべきだとされているのか、作品の中から探っていきたい。

つぎに大学教授をはじめ閩南、客家人の問題について発言している研究者にインタビューして、現在の台湾でこの問題がどのように考えられているのか明らかにしたい。

最後に台湾における閩南人、客家人に会い、面接調査をしたい。それぞれ相手をどのように認識しようとしているのか明らかにしたい。

以上の４つの方法に基づいて収集した資料を基にして、本研究を完成させたいと考えている。

第一章　閩南人と客家人

第１節 四波にわたる閩南人と客家人の台湾移住

（１）第一波

明代において、なかんずく１６世紀中葉から末葉にかけて、台湾は漢族系「海賊」もしくは商船などの基地あるいは水と食糧の補給地として使われたという。当然ながら漢族による台湾「開拓」とは、補給地に付随した農産物の自給と補給的生産にほぼ限られたスケールのものと考えて大差なかろう。

やや遅れてオランダ人がまず澎湖島（１６０３年）に現れたが、１６２４年には明朝の勧告に従って同島から台湾本島へ撤退した。オランダ東インド会社は、同３０年に台南の安平にゼーランディア城を、次いで５０年には同対岸の本島部・赤嵌にプロヴィンシア砦を築いて、台南近辺を中心に、明朝の黙認下で通商と重商主義的殖民地経営をはじめた。

ほぼ同じ頃満州族の愛親覚羅一統が南下し、李自成の北京攻略で明が滅ぶや、清が入関して北京に都を定めた。以後、清の勢力は南下を続け、その圧力で華南は乱れた。人々の中には台湾に難を避け、オランダの台湾「開発」に便乗したり、利用されたりして定住していった者があったであろうことは想像に難くない。

なお１６２６年には、スペイン人がオランダ人に対抗して、基隆と淡水に城塞を築いて北部台湾に勢力圏を拡張しようとしたが、長く続かなかった。北部台湾に拠ったスペイン人との取引で、漢族が海峡を渡って北部台湾にも一部定住したのであろう。

オランダ人がスペイン人（１６４２年）を追い出し、台湾で独り覇権を行使できたのは、前後あわせて３８年間だった。この間、オランダ人入植当初は数千人と言われていた漢人移住民の数は、３０数年後には１０万人にふくれ上がっていたと推測されている。この時期に至るまでの期間を、漢族の第１期台湾移住期と見たい。

（２）第二波

清朝勢力の南進に伴って、日本の浄瑠璃や歌舞伎でも有名な国姓爺・鄭成功（図１）も又追われることになった。彼は金門経由で入台を試みる。鄭は一統を率いて、自分の父鄭芝龍の元の領土を返せと迫り、オランダ人の駆逐に成功する。オランダ人支配の末期には台湾の人口が約１０万人に達していた。鄭成功が率いて上陸した軍隊は２万５０００人であったが、その後また５０００人ほどの家族が渡台している。

一統は、プロヴィンシア城を承天府と改称し、「抗清復明」を掲げ、台湾を大陸反攻の基地にすべく経営をはじめたのは１６６０年のことだった。鄭一族は泉州府南安県出身であるため、彼にしたがって入台した官民の中核が閩南人を主流としたのは、当時の時代背景からして当然であろう。たとえ、軍・政の指導者層に、他地方出身の明の遺臣が多少いたとしてもである。このようにして鄭一統が２～３年間にわたって、泉・漳両州の閩南人を中心に、台南を首都として、南は現高雄・屏東方面に、北は嘉義、彰化、新竹及び台北の一部へと「開拓」フロンティアを拡大していった。これは漢族による移住開拓の第２期に当たる。

国姓爺・鄭成功像

（図１）

大陸から台湾への移民図

（図２）

（３）第三波　移民の黄金時代（図２）

第三の波は、清朝による台湾合併（１６８３年）に始まる。鄭成功の孫、克土爽が内紛などで清の攻勢に抗しきれなくなって、一族郎党を率いて清に降ったのは、１６８３年だった。鄭一統による台湾治政は２３年間をもって幕が閉じられた。台湾における明の「根」を絶つために、清は鄭一族と明の魯王世子朱桓らの宗室をはじめ、官員２０００、兵４万余名を大陸に移した。内部分裂で克土爽に背を向けた一部は、南ベトナムに逃がれ、後にベトナム南部の華僑社会の中核の一部を担うこととなった。

一般漢民族は、日が出れば耕し、日が入れば憩うとばかり「帝力何ぞ我れにあらんや」ときめこんで台湾に留まったのは自然の成り行きであったといえよう。清は改めて台湾に一府三県を設置、遷界令（注１）をも解除した。これを契機に戦乱で生活苦にあえいでいた閩南の民たちは、改めて大挙して「処女地」台湾に流れこむこととなった。北部と北東部には、先住台湾人からの反撥の脅威があったとはいえ、漢族移民にとってのフロンティアがなおも広大に残っていたことを、人々が知ったからである。この時期に至るまでの泉・漳の民に加えて、新たにあまり海になじみのない客家の民が移民の大群に加わることとなった。ちなみに、「三禁の制」のため、客家人は閩南人よりも遅く移住せざるを得なかったので、先住の閩南人とさまざまな摩擦を起こすことになる。

（４）第四波

アヘン戦争（１８４０年）から太平天国、さらには同治、光緒年間の清末に至る期間に漢族の台湾移民の第四の波即ち第四期が現れる。特に太平天国にかかわった客家の一部が入台したが、移住先を主として「蕃界」（先住民の居住地域）との接点の山麓地帯、宜蘭、台東、花蓮港、埔里の辺境（注２）の地を選んだ。これは、客家の古老たちの伝承で伝えられているように、先住台湾人の地、いわゆる蕃界に限りなく接近した土地に浸透を試みることだったのである。客家人、閩南人の一部が盛んに先住民との通婚などによって彼らを同化して行ったのもほぼこの時期をピークとしたようである。

台湾総督府が台湾で行った類似調査で『台湾在籍漢民族郷貫別分調査』（１９２６年１２月現在）の集計を基に作成された「台湾在籍漢民族郷貫別分布図」は、閩南系と客家系の分布をカラーで見事に描き残してくれている。因みに同統計で見た両者の人口比は、閩南人が８６％で客家人が１３％強であった。分布図から、閩南人のほとんどが沿岸一帯の平地部を、客家人は中央山脈に接した山麓地帯を、それぞれ主な居住地帯にしていたことが一目瞭然である。

第２節　閩南人とその文化

(1) 言語

閩南人は閩南語を話す人々である。閩南という呼び名は馴染みがないかもしれない。閩南語はホーロー語という呼び方もされるが、文明の中心を担っていることを自負する漢族が福建省を「閩」と呼んだことに由来し、漢字の中に「虫」が入っていることからも分かるように蔑称である。自称である「ホーロー」には、さまざまな語源解釈にもとづく漢字表記「福佬／河佬／河洛」があり、そのどれを使うかが民族の尊厳に関わってくるのである。

閩南人は主に１７世紀の末以降、中国大陸の福建省南部の漳州や泉州から移民として海を越えて台湾に渡ってきた。この閩南人が話す言葉が、一般的に「台湾語」と呼ばれている。閩南語とは、台湾の対岸にある今の中国福建省南部で話されている言葉であり、福建から台湾に移住してきた閩南人移民が台湾にもたらしのもので、台湾の閩南語とほぼ同じものである。しかし言葉が似ているからといって、台湾の閩南人と福建省南部の閩南人が、人種的にも同じかというと、そうとはいえない。人種と言語は別物であり、言語が同じだからといって、同じ血統の民族とは限らないからである。

閩南人の生活様式は勇敢で冒険的であり、冒険心に富んだ開拓者である。明朝末年に福建地方では食糧の自給ができず、歴代、慢性的な飢餓状態にあった。福建地方の成語に、「三山六海一分田」がある。福建地方の耕地の少なさを形容したものである。また人口過剰のために人民の生活は苦しかったので、台湾の土地が広く肥えていると伝え聞いて、一旗揚げようと考えた度胸のある者は渡航を企てた。しかし台湾海峡には常に不測の波風があり、運が悪ければたちまち海の藻屑になってしまう。したがって船に乗る前には誰もがまず媽祖の廟に行って祈るのを常とした。

(2) 宗教信仰

「媽祖」（図３）は台湾の閩南の人々の守護神である。媽祖は１０世紀の中国福建地方の孝女・林黙娘を神格化したものとされている。航海の一路平安を護ってくれる「媽祖」は、閩南人が代々崇敬してやまない、閩南人全体の守護神である。媽祖は当時の移民が「黒水溝」（注３）を超えて、３００年間を通じて守り続けてきた、幸運を祈る主たる対象であった。運よく台湾にたどり着き事業に成功した人は、台湾に媽祖廟を建てて恩返しをしようとした。こうして媽祖は台湾で最も広く民間の信仰を集めることになった。福々しく物静かな媽祖の慈悲深い相貌は、困窮流浪の移民の心情をどれほど慰めたことか。鹿港の媽祖廟の傍らに大書された「民安んじ物阜（おお）く、海静かに波平らか」の８字は、

昔から今に至るまで台湾人民の共通の願望である。今日ではどんな辺鄙な村落にも、媽祖を天上聖母としてたてまつる媽祖廟があって、村人の信仰の中心となっている。媽祖は閩南の守護神だけでなく、今日では台湾人特有の守護神となって、願い事があればまず媽祖に祈願し、喜びがあれば真先に媽祖廟にお礼参りをする習慣ができあがっている。

政治家の信奉も厚く、鄭成功は最初に媽祖の廟を建てた人物だった。施琅はそれにとどまらず、澎湖で鄭軍を破ると陰ながら媽祖の加護を得たと称して、彼女に勅令で称号を与えるよう康熙皇帝に正式に上奏した。元々「天妃」と称されていたこの海上交通の女神は、こうして「天后」に昇格し、澎湖の媽祖宮も天后宮に改称された。

海上交通の女神「媽祖」

（図３）

今の台湾には媽祖が主神として祭られているお寺は５００余りあり、毎年媽祖の誕生日旧暦３月２３日に各地の媽祖のお寺で祭りが行われている。

台中の大甲における鎮瀾宮は２００年以上の歴史があり、大甲人民の信仰の中心となっている。毎年旧暦の３月になると、大甲鎮瀾宮の媽祖は台中、彰化、雲林、嘉義など中部４縣に渡り、途中数十軒の媽祖のお寺に立ち寄って、最後に新港后天宮に着いてからまた大甲鎮瀾宮に戻ってくるという、７泊８日にわたって何十万人も動員する「大甲媽祖遶境」という盛大なイベントが行われる。「遶」という漢字は日本語では使われていないようだが、「巡る」と同じ意味で、「遶境」はある範囲内のいくつかの場所に次々に立ち寄ることを意味する。往復で２００キロ以上もあるこの遶境はすべて徒歩で行われる。イベントの日

時、出発の時刻は、旧暦の１月１５日に籤で決められ、その後の準備作業の各担当なども信者たちが籤で決める。大甲の人々にとってはこのイベントに尽力することが責務でもあり、光栄でもある。遶境の路線にあたる地域の人々は自分の家からお供えを出し、あるいは通過する信者のために食べ物や飲み物を用意しておく。とにかく、このイベントのために皆黙々として自分にできることを最大限に実行していく。

信者たちは媽祖の本尊が自分の上を通過すれば自分が守られると信じ、次から次へ一列になってうつ伏せになって並んでいる。最初から最後まで付き添うお参りの信者もいれば、途中で入ってくる信者もいる。いくらきつくても媽祖の守護が得られると確信しながら皆誇りを持って最後まで歩き終える。それも媽祖に対する敬意である。

(3)伝統音楽―歌仔戯

「歌仔戯」、（図４）（図５）（図６）閩南語で「ゴアヒ」と発音する。台湾オペラと呼ばれることもある。それは歌仔戯がすべて台湾で生れ育ったオリジナルな伝統芸能だからである。歌仔戯は今世紀の初頭、台湾北東部の蘭陽平原に誕生した、比較的歴史の新しい地方劇である。私の小学生や中学生ごろ、よくテレビで放送されている歌仔戯を見たものである。放送する時間はだいたい夜の６時半頃からの３０分間だった。家族と一緒に夕ご飯を食べながら見るのである。その時間帯に放送される歌仔戯は必ず視聴率第１位といわれていた。とはいえ、歌仔戯とはいったい何であろうか。

歌仔戯　　**露天芝居**

（図４）　　（図５）

歌仔戯の舞台裏　　楊麗花さん

（図６）　　（図７）

歌仔戯はテレビがまだ普及していない時代には、野外歌仔戯として盛んに行われていた。今でもお祭りの時などに行われ廟の近くの道端に、仮設の舞台を建て、誰でも気楽に見ることができるようになっている。近所の人の中にはわざわざ自分の家から椅子を持ってきて歌仔戯を楽しむ人もいる。閩南人は、野外歌仔戯が演じられているところを通ると、必ず止まってしばらく鑑賞する。今では野外歌仔戯は地方の祭りなどでたまに見かける程度であり、歌仔戯の舞台は野外からテレビの世界へと移ってきた。テレビでの主人公は必ず女性によって演じられる。主人公以外の演じ手は、日本の宝塚とは異なり、女性とは限らない。一番人気は、４０年間も歌仔戯の世界に心血を注いでいる女優、楊麗花である。歌仔戯＝楊麗花（図７）と言ってもいいかもしれない。

歌仔戯は台湾の農耕文化の産物だと言われている。娯楽の少なかった時代に誰にでも分かりやすい歌仔戯はたくさんの人気を得たのである。しかし、この素朴な農民たちが生んだ台湾の芸能は社会の知識層には軽蔑され、大事にされなかった。昔の歌仔戯の出演者は、親の代から受け継いできた人、あるいは貧しさから生活上やむを得ず演ずるようになった人々たちだった。そのような見られ方しかなされなかった結果、歌仔戯は時代の趨勢とともに衰退し、若い世代の人はテレビによる放映以外ではほとんど歌仔戯を見たことがないという状況になっている。

しかし、現在、多くの伝統芸能が保護を受けなければ廃れていく運命にある中で、歌仔戯だけは今でも絶大な人気を博し、保護なしでも十分生き長らえる力を持っている。いわば生きた伝統芸能である。それだけに歌仔戯を理解するということは、台湾の閩南人文化あるいは台湾の文化の本質や深層を理解することにつながる。

(4)食

閩南人が人と会った時の挨拶の言葉「呷飽未？」は、お腹が一杯ですか、という意味で、ちょうど日本人の「こんにちは」のようによく使われる。それはちょうど台湾の先人達が台湾を切り拓いてきた苦労を今に残している生きた化石のようなものである。「民は食を以て天と為す」（注４）と言われているように「食べること」ほど重要なことはない。台湾が先進国の仲間入りし、肥満のような文明病がどこにでも見られるようになっても、「呷飽未？」は、やはりもっとも重要な挨拶言葉である。

閩南人の主食は米である。よく粥として食べるが、客家人は乾飯しか食べない。副食では、閩南人は魚、蟹、えび、イか、貝類などをよく使い、新鮮な海鮮食材を豊富に使用すること、旬の野菜を使った料理が多いといった点が大きな特長である。菜（汁けが多い料理）が多く、味は比較的淡泊で、牛肉はほとんど食べない。昔、牛は耕作の主要な動力だったので、その貢献にたいして食べるに忍びなかったのだろう。耕作が機械化された今日でも、その風はなお残っている。

肉粽

（図８）

噴水鶏肉飯

（図９）

また、閩南人は、材料を決して捨てない。余さずに使う。例えば豚でも、骨は閩南人の料理のスープのだしの基本的なものだし、血もスープにして、豚のアブラをいためたものやニラを加える。美味かつ大衆的なメニューの一つだ。もちろん皮、脳髄、内臓等、毛以外はすべて食べる。そのためにさまざまな料理方が発達してきた。

伝統的な料理の特色の一つは、できるだけ調味料を使わずに、材料本来の味を引き出そうとすることにあるだろう。一般的には味は薄味だが、地域差もあって、閩南の間では甘い味が、客家の間では塩辛い味が好まれる。

閩南料理で使う麺は、基本的にはやや太めの棒状麺であり、日本のラーメンのように鹹水を使っていないため全体に白っぽい。また、メニューの中には例えば担仔麺のように、小麦の麺に代えてビーフンなどを使用するものもある。

担仔麺とはエビでだしを取った味噌仕立てのスープに麺を入れ、豚そぼろ肉や刻みネギ、もやしなどがトッピングされている。もともとは台南（閩南の村）の名物料理であり、中でも「度小月」が特に有名である（麺の代わりにビーフンを使ったものもある。また担仔麺に加えて香腸（腸詰）や肉団子などのサイドメニューを加えることができる）。

また、閩南料理で使う飯類としては、例えば魯肉飯、鶏肉飯と肉粽（図８）などがある。

魯肉飯とは白飯の上に豚そぼろ肉をトッピングして甘辛いタレをかけたもの（店によってはこれに白菜や固ゆで卵などを乗せているものもある）。値段も安く最も庶民的な料理の一つで人気が高い。

鶏肉飯とは白飯の上に蒸して細く裂いた鶏肉を乗せ、甘辛いタレをかけたもの。魯肉飯同様最も庶民的な料理の一つ（嘉義市の「噴水鶏肉飯」（図９）のように、鶏の代わりに七面鳥を使ったバリエーションもある）。

肉粽とは台湾風ちまきのことで、もち米の中に豚の角煮や椎茸などの具を入れ、ハスの葉や竹の皮で包んで蒸したもの。中に入れる具は肉類や海鮮など、店や地方によってさまざまなバリエーションがある。

第３節　客家人とその文化

（１）耕読伝家

客家もまた中原より南下し、中国南方の諸省に散っていった人々である。言語はもとより風俗習慣、性格のいずれにも際だった特徴を持っている。台湾客家人は主として広東より移民したものであり、閩南とは極めて多くの点で共通しているが、いくつかの点では根本的な違いもある。客家はその気質が勤勉で節約を旨とし、団結心が強く逞しく剛毅であるとの印象を人に与えている。客

家の民謡と舞踏は、軽快でよく響く澄んだメロディで、彼らの楽天的な態度を反映しており、閩南音楽の、没落貴族のような恨みと愁いの情は基本的に存在しない。

客家人の生活様式は「耕読伝家」であり、この四文字が一切を説明していると言ってよい。耕読とは中原の正統の古代風俗習慣であって、日が出れば耕作し、日が沈めば休むという小規模農業的な経済生活である。読書は最高の精神活動であると同時に、社会的地位を高める主要な手段である。この両者が結合して典型的な儒家思想の政治経済体系を成しているのである。それは日常生活にしっかりと根を張った一種の生活哲学である。その中には伝統思想にみられる商業を軽んずる要素も当然含まれる。

客家人が南方の各省に散らばったことは、地理的環境において海洋貿易と商工業に有利となった。一般の閩南人や広東人は外国へ出ることを足掛かりに豪商となって、農業から全く遠ざかっていったのにたいして、客家人は農業生活を維持することを選択した。彼らが船に乗り海上を漂い、台湾、ルソンなどの地にまで行ったのは、新しい耕地を探すためであって、海洋経済の利にあずかろうとしたわけではない。このことは、客家人に、地理的環境からの影響を超えて更に強く働いたのは伝統文化の影響であったことを物語るものである。

こういった生活様式と信仰のゆえに、客家の人々の中からは容易に大商人を生み出せなかった。しかし、それは客家の経済生活の制約のみにその原因があったのではなく、むしろ人々の価値観の中で、大商人になることが決して成功の模範とは考えられなかったことに原因がある。ある客家人がたとえ大金持ちになったとしても、粗末な学識しかなく、官職に就いていないのであれば、決して尊敬されることはないし、かえって笑い者にされる。個人や家族の地位を高めるには必ず教育の過程によるのでなければならない。これが「耕読伝家」である。

このように客家が教育を重視するのは普遍的なことであり、彼らは伝統的な読書人の観念と気持ちを持っているのである。

書物の中で説かれる大きな道理とは、身を修め家をととのえ国を治め天下を平定することであって、上は国家を治め国を救い民を救い、下は努力して官職を得て、祖先の名を揚げることである。このような観念のもとで、客家の若者たちは容易に、軍事の道へ、あるいは文字に心を傾けて文章によって世を渡る道へ向かいやすい。強い政治意識をもって深く考え、民間の最下層にまで入り込み文章をよくするので、当然のことながら、不撓不屈の性格を合わせ持った偉大な政治家、軍事家、思想家、文学家を生み出している。

台湾客家人によって達成された成果は、やはり政治、軍事、文学の領域に多い。

また、客家人は文字を神聖視するため、一文字でも記されている紙は、「惜字亭」（図１０）（聖蹟亭、敬聖亭、字紙亭）という特別の炉で燃やされてきた。

現在でもこの風俗は続いている。

惜字亭

（図１０）

その成果として、客家女性にもほとんど非識字者がいないという珍しい現象がみられることとなった。閩南女性にたいしていわれる「女子無才便是徳」（注５）とは大いに異なっている。

また、特色として客家の女性の労働能力・地位が高いことなどがあげられる。女性の労働力の点について言えば、つい百年くらい前までは、習慣として漢民族の女性は纏足するのが当然とされていた中で、客家の女性は「大脚」（注６）という自然足の風習を守っていた。纏足では野良仕事や家事に不便をきたす、ということが非纏足の主因だったに違いない。客家の女性といえば、昔から「働き者」ということで通っている。貧しい家を支えるために、男性は遠方への出稼ぎなど、長期に亘って家を空けることも少なくなかったが、女性は男性に代わり一切の労働を受け持ってきたのである。

（２）宗教信仰

客家の守護神「三山国王」（図１１）に関しては、元々南宋時代の広東地方の地方豪族が、土地を守り功があったとして王に封じられたが、死後、玉皇大帝より三山国王に封じられ、広東揭陽県の明山、独山、巾山を治めたと伝えられている。要するに客家人の守護神は山の神である。では、なぜ三山国王が台湾客家人の守護神となったのであろうか。

清朝の時、「三禁の制」のために、客家の台湾の移住は、閩南の泉州や漳州のそれに比べて大幅に後れをとった。閩南人がすでに良い土地を占めていたため、客家の人々は条件の悪い土地に住みつくしかなかった。丘陵地帯に住む客家人は、付近の山間部に住む先住民を恐れなければならなかった。客家人の生

活は苦しいものだった。そうした理由で山や山間部に神威を覚えるようになり、「三山国王」が郷民を守ってくれると信じるようになったのである。

三山国王廟は台湾には１７０余りあり、客家出身者が最も多く暮らしている新竹、苗栗、屏東、さらには北部の宜蘭、中部の彰化、雲林、嘉義などの県や市にも広く分布している。中でも台湾最古の三山国王廟である彰化県渓湖鎮の「霖肇宮」では、１９８７年に、開基４００年の祭典が行なわれた。もともとは明朝の万暦１４年（１５８６年)、広東揭陽県の馬義雄と周榆森という人が台湾に漢方薬になる𦼮実を採りに来た時、故郷の霖田廟の三山国王の香を身に付けて持ってきていて、鹿港から台湾に上陸した翌年、渓湖に廟を建てたのが今日の霖肇宮である。

（３）義民の信仰

客家人は、客家間の団結が強いと言われる。年に一度、新竹県新埔鎮の義民廟で開催される義民祭はその一つと言えるだろう。義民祭は台湾北西部の客家の村が１５の祭典区に分れ、輪番で主宰する盛大な祭りである。祭神の義民爺とは、清朝の頃の「林爽文之役」に義民軍として戦った客家の戦死者たちである。彼らはその功積により乾隆帝から褒忠の書をもらい、ついに客家の守護神義民爺として壮大な義民廟に祭られるようになった。毎年陰暦の７月の義民祭には、各地からの客家人が参拝のため廟をうめつくし、その結集の熱気が最高度に表出される。

また豚を犠牲とするので、分担年にあたる祭典区の各戸では、いっせいに数千の豚が殺され、供えられる。そのありさまは盛観である。また、毎年恒例の「神豬競賽」も行われなければならい行事であり、１００年以上前からある客家の伝統である。「神豬」（図１２）というのは７００キログラム以上の体重があり、もう自力で立てないくらい太らされている巨大な豚である。豚の飼い主は豚を１年２年かけて養って、その重さを競争する。毎年優勝した豚は義民祭に殺されて飾られている。

特等の豚は１５６７台湾斤（７８３．５キロ)。口にくわえたパイナップルは旺来といい勢いが盛んな意味もあるらしい。神豬の競争は年々激しくなってきている。

祭りが終了すると、奉納された豚はただちに切り分けられて、分担区外の親しい人々に分配される。数年前、Ｓさんの家で分配された豚肉は８５個であった。これはその後１４年間にＳさんが返礼としてうけとる豚肉の総数でもある。この肉を通して人々は、義民爺から平安をいただき、またゆるぎない個々の人間関係も確認しあう。

義民廟は、この１００年の間、客家人の中心的な信仰となっており、客家人団結の精神的象徴になっている。

三山国王

（図１１）
祭壇に供えられた神豬

（図１２）

（４）伝統音楽―客家山歌

客家は自分たちの歌う歌を「山歌」と呼ぶのは、おそらく台湾に移住した時、一等の開拓地は閩南人によって占められていたため、山岳地帯に住みついた彼らが、山の中で柴刈りや茶摘み、田植えなどをしながら歌った、山で歌う歌を「山歌」と呼ぶようになったからではないかと思われる。客家は日ごろの生活の中で、山を歩きながら歌をうたったり、あるいは仕事をしながら歌をうたっている。

歌うのは歌手や歌の得意な人だけではなく、老若男女、いわゆる普通の人た

ちである。彼らは一年３６５日、朝から晩まで歌っている。だから客家のいるところには必ず客家山歌があると言ってよい。

客家の山歌の内容は、すべて自分の生活する場で起きた出来ごとである。その場で即興で創作され、使う言葉はすべて客家語である。俗語をふんだんに使い、発音も意味もまったく他の方言とは違うので、客家山歌は客家人にしか分からない面白さをもっている。客家山歌には茶摘みの歌、恋歌などの歌が多いが、中でも一番多いのは恋歌である。それは主に男女が「対歌」の形で歌ったものである。以下に、およそ客家人なら誰もが聞いたことのある恋歌を取り上げてみよう。

新做書台釘銅釘、　作りたての机とその銅の釘のように、
死同死来生同生。　死ぬも生きるも二人は一緒。
還生両人共枕頭、　生きているうちは同じ枕で、
死哩両人共金瓮。　死んだら同じ骨壷の中で。（注７）

客家の恋歌は、自分の想いを愛する人に伝える歌であるから、即興創作するにあたって、必ず分かりやすい内容でなければならない。しかも、直接的な表現は好まれないので、「双関語」や比喩を使って相手の心を射止めてしまわなければならない。本当に相手のことを慕っていなければ、なかなか心に響くいい歌は歌えない。

童謡は客家の子供たちの遊びの一つであり、子供たちは童謡を歌うのが大好きである。子供はいつごろ童謡を覚えるのかわからないが、いつの間にか友達と遊びながら自然と歌えるようになっている。

おそらく、遊びながら歌うのは、童謡を歌わないと遊びの面白さが半減するからであろう。年上の子供が年下の子供に教えたり、また、夜、父親の膝の上で童謡を聞きながらそのまねをしたりすることで、自然と覚えるようである。だから、自分で歌を作るというよりも朗唱しているといった感じである。
だが、友達と遊びながら歌う童謡は、気分によって内容を替えたり、長くしたり短くしたりして、集団で創作することもある。地方によって童謡の内容が少しずつ違ってきているのは、童謡が口承で伝えられ、その間に起った内容の取替えによるからであろう。

子供たちの歌う歌詞は、単純、素朴、そして自由なので、大人たちが歌う山歌よりももっと面白い。それは天真爛漫な子供たちの心が、その土地の習俗、生活、人々の喜怒哀楽を的確にとらえるからである。

以下に、およそ客家人なら誰もが聞いたことのある童謡を取り上げてみよう。

「一歳叫」　　「一歳ギャー」
一歳叫、二歳笑、　一歳ギャー、二歳ニコニコ、

三歳攬柴阿姆焼、　　三歳柴を取ってお母さんにあげ、
四歳扛得油燈盞、　　四歳油皿をもち、
五歳織得好幼麻、　　五歳麻を織り、

六歳繡朶好牡丹花、　六歳牡丹の花を刺繡（ししゅう）し、

七歳媒婆就来講、　　七歳仲人がやって来て、
八歳就食人麻茶、　　八歳結納の麻布とお茶をもらい、
九歳留髪十歳嫁、　　九歳髪をのばし、十歳嫁ぎ、
十一歳攬子做阿姆。　十一歳子供を抱いて母になる。（注８）

年齢が順番に出てくるので、この童謡を覚えると、子供は簡単に自分の年齢を数えることができるようになる。年齢ごとに出てくる出来事は、子供たちの想像で創られた出来事であり、子供のユーモアのセンスと言えよう。

客家人にとって、時代が変わっても、場所が変わっても、客家山歌は変わらずに、子から孫へ、孫から曾孫へと代々受け続がれて今日まで来た。そして、今後も変わることなく受け続がれていくであろう。なぜなら、昔何度も歌った歌は年をとっても決して忘れることはない。それらには客家人の心が宿っているからである。

（５）食―独特な風味の食文化

古来、民は食を第一とするという諺がある。客家の食文化は、農耕社会とくに稲作社会を基礎としたものである。人はその地に適合して生活していく。客家の伝統的な食文化は、彼らが居住したのが山あいであったことから、大きな特色をみせている。客家料理の特色には三つあり、その第一は、日常的な材料を使用するということであった。

客家料理のメニューにさっと目を通しただけで、直に、客家料理の材料は客家人自身の手になるもの以外のものは、何もないということが分かる。豚、鶏、家鴨や養殖の魚、各種の栽培した野菜や野生の山菜などが、彼らの食卓に上る食材である。よその土地から運ばれて来たものや山海の珍味はきわめてまれである。客家のメニューの中には、燕の巣、熊の掌、あわび等の高級品は無く、「するめいか」さえめったには見られず、ましてや、閩南人が好んで食べる伊勢えびや蟹などの海鮮料理も無い。それどころか、閩南人に比べて、客家人はむしろ上等でない材料を好んで使用する。例えば、豚の内臓、頭、足などであるが、これらの材料はたぶん、精肉に比べるとかなり安いからであろう。さらに、多くの人々が始めから捨ててしまう材料を使い、客家は自分たちの技術を駆使して、味のよい料理を作り出すのである。客家料理の中には、上等な精肉

を使うメニューは極めて少なく、かえって内臓、頭や足などを用いた料理が大いに発達した。品種が多いばかりでなく、味もよくて多くの人々を引き付けている。それらの中には、遠くまで名が通っていて、客家料理の名品として、客家人以外にも大いに愛好されているものもある。「炒猪肥腸」（図１３）や「炒牛毛肚」などは、ことに有名である。

「炒猪肥腸」―客家のメニュー、その１－

豚の大腸、しょうがを薄く切り、唐辛子、酒、大量の酢などの調味料を加え、ごく強い火で数回裏返しながらいため、お皿に盛って熱いうちに食べる。火加減が大事で、いためすぎると硬くなってかみにくくなる。これは酸っぱく辛く、また、さくさくとしていて軟らかくて風味があり、賓客の歓迎宴における最高の料理とされている。

炒猪肥腸

（図１３）

八脆醉仙

（図１４）

「八脆醉仙」（図１４）―客家のメニュー、その２－

牛の舌、のどぶえ、心臓、肝臓、脾臓、重弁胃、皺胃、および膀胱の８種、各１５０グラムをよく洗って薄く切り、しょうが、ねぎ、酒、酢などの調味料を加え、強火で１時間蒸してでき上がり。

客家料理の第二の特色は、おおざっぱであり、豊かな郷土色に満ちていることである。客家料理の郷土色はまず、包丁さばきが大まかで、食べ物が大きな塊となっていて、飾りたてたところがないことに現れている。あまねく知られている「梅菜扣肉」、一切れの肉が１００グラムである。多くの人に喜ばれる「白斬鶏」は一羽の鶏を１０～２０片ぐらいに切ったものである。「白斬鶏」―客家の第一のメニューであるが、客家の社会では「鶏が無ければ宴会が成り立たない」とよく言われ、宴会での最高の鶏料理は何といっても「白斬鶏」であろう。「白斬鶏」の起源は客家人の先祖の祭りにあるといわれる。毎年春と秋の祭りには白斬鶏が必ず祭壇に供えられ、儀式が終わった後、一族の人々はその鶏を切り分けて、遠近の族人にふるまったという。そういうところは閩南人と似ている。

客家料理の第三の特色は、料理が塩辛いことである。客家料理が塩辛いのは、客家が辛酸をなめた社会的、文化的背景があるからである。

その第一は、長期間にわたる流転、激動の生活上の必要から、客家は携帯と防腐のために、塩漬けをはじめとしてきわめて多くの漬物類を作り出した。

二つは、客家は台湾に来た後、生活は苦しく食糧は不足気味であったから、衣食を節約せざるをえなかった。食べ物が塩辛いのは、おかずを節約する手段の一つであった。

第三としては、客家は毎日朝早く起き夜遅くまで働いた。台湾は炎熱地帯であるから、汗が玉のように流れ塩分を多く消耗するので、副食を塩辛くして塩分を補給したのである。

（６）言語文化の宝石―客家語

近年の言語研究の成果によると、客家語が最終的に形成されたのは、およそ南宋から元朝にかけての間とされている。客家の居住地が外界から閉ざされていたという地理的環境と客家のもつ強烈な「言語忠誠」（language loyalty）（注９）意識のため、客家語は独自の道を歩き、唐宋期の黄河流域の中原古語の成分を多く残しており、古漢語の生きた化石ともいえるものとなった。

中国の言語の中で、呉語は周代までさかのぼることができる。その後、東夷民族と融合したので、古東夷語の影響をかなり受けた。例えば閩南語は前漢のころに発生したが、少なからず呉語と混じり合っている。それに対して、客家語は閉ざされた地理環境と「言語忠誠」意識に守られて、外からの影響に抵抗し、原始漢語本来の面持ちを今日まで保っているのである。

客家人は特に自分たちの言葉を大切にする。台湾の各地の客家はみな「寧売祖宗田、不売客家話」（祖先の田畑は売っても、客家語は捨てない）（注１０）という古訓を尊ぶ。困窮に陥ったとき、代々受け継いできた大切な財産である田畑をやむをえず売ることはあっても、客家語を捨てることはできないというのである。

二種類の言語が使われている「二重言語」（注１１）の地域では、子供は家に帰ったら客家語を話さないと年寄りに叱られる。若者が久しぶりに帰郷したとき、他の言葉を使うと祖先を忘れたと叱責される。客家のところへ嫁入りした花嫁は、一日も早く客家語が使えるようにならなくてはならない。嫁いだ娘が実家に帰ってきたときは、当然客家語を使わなければならない。

この強烈な「言語忠誠」意識の源は、客家語自身にある。客家人は高度な教育と文化をもち優雅な言葉を使用していたので、自分たちの言葉を特に誇りに思い、絶対に捨てなかったのである。

このため、客家人どうしはいつも、客家語を通じてお互いを認め合っている。客家語は心をつなぐ強力な絆となっている。遠いところへ行って商売をしたり、仕事をしたりするとき、客家語で二言三言、話をするだけですぐにお互いに特別な親近感を覚え、お互いに助け合うようになる。

ところで、客家語は長い間、他の言語と混じりあって存在してきた。言語接触の過程では、お互いに平和的に共存したり、融合しあう一方、大小さまざまな摩擦も少なくなく、文化衝突さえ引き起こしている。また、若者が母語を話せないようになっているので、客家語を話せない若い客家も増えてきている。その点は台湾の深刻な問題になった。（注１２）

第４節　まとめ

このように、閩南人と客家人はそれぞれの文化的特質を持っている。その文化的特質は言語、宗教信仰、年中行事、結婚や葬式の習俗、住居、衣服など、さまざまな点で大きな違いが見られる。

１７世紀末以降、大挙して台湾に移住してきた漢民族は、閩南と客家の、二つのグループからなっていた。閩南の母語は閩南語、客家の母語は客家語であったが、閩南語と客家語では、お互いの意思の疎通が全くできないくらい語彙や音韻体系が異なっていた。その上、清朝の時の「三禁の制」のため客家の台湾の移住は、閩南の泉州や漳州のそれに比べて大幅な後れをとった。その後、施琅（「三禁の制」の第三項は施琅の建言を康熙帝が採用して取り入れた。施琅は広東省民が鄭氏に熱心に協力したことをひどく憎み、この機に乗じて報復したのだと言われた）の死後、客家人の移民制限が緩和され、台湾に渡る人は激増した。１７８６年になると、全台湾で「１０人のうち泉州・漳州出身者が

６、７人、客家人が３、４人」と言われるようになった。こうして台湾の島を二つの省から来た移民で占めるようになっても、お互いに言語が異なり、誤解が生じやすかった。そして、閩南人がすでに良い土地を占めていたため、客家人は条件の悪い土地に住みつくしかなかった。丘陵地帯に住む客家人は付近の山間部に住む先住民を恐れなければならなかった。そして、客家人の生活は苦しいものだった。

また、当時、清朝は統治の便のために、意図的に両者の矛盾と衝突を利用して、社会の団結を阻害する分裂政策を進め、間接的に「分類械闘」を一層助長させた。

開拓時代初期には、守護神を祀った廟を団結の中心として、閩南と客家、あるいは閩南の漳州人と泉州人の間で、土地の所有権などをめぐり「分類械闘」と呼ばれる争いが頻発した。漳州人と泉州人は同じ閩南の出身で、似たような文化的背景を待つということもあり次第に融合が進んだが、閩南と客家の融合は、言語をはじめとする文化的差異、土地の所有をめぐる利害関係、積年の対立意識などがあり、時代が下がってもなかなか進まなかった。

日本統治下の１９２０年の統計によれば、台湾における閩南と客家の人口比は、閩南は８５％、客家１５％という割合であった。このように、閩南と比べて人口が圧倒的に少ないということに加え、台湾への移住の時期が閩南より少し遅れたということも、客家にとって大きなハンディとなった。客家が台湾に移住して来た時、西海岸に沿って展開する肥沃な平野地帯はすでに大部分が閩南人によって占められており、後から来た客家の入り込む余地はなかった。そのため客家は、やむなく「藩界」に近い、生活条件の悪い山岳地帯の未開墾地などに入植せざるをえなかったのである。

ちなみに現在、客家が特に集中して住んでいる地域は、苗栗県（県人口の６８％が客家）、新竹県（同６５％）、桃園県（同４８％）、花蓮県（４０％）などであり、客家人口の多い地域は、桃園県（１２８万人）、台中県（１２２万人）、高雄県（１０９万人）などとなっている。（注１３）

このように、清朝統治時代の台湾社会は、多数集団である漢族、さらにその中でも多数を占める閩南人が中心となっていた。当時の台湾社会においては、同じ漢族の間では閩南が客家を差別・抑圧するという、差別構造ができあがっていたのである。

閩南と客家の械闘の原因にしても、単純に文化的、政治的の要因だけではなく、他にもいろいろの要因が重なっているのであり、第二章では、その点に関して取り上げ、詳しく閩客の分類械闘の原因を考究したいと思う。

第二章　閩客の分類械闘

第１節　分類械闘

分類械闘とは、清朝時代、移住民の土地獲得の利己主義が、清官によって「分類械闘」と名づけられた醜い私闘としてあらわれたものである。その意味は、類を分けて、つまり仲間同士が結束して、武器すなわち械をもって大仕掛に戦うということである。

また、仁井田陞はその研究の序説で、械闘について次のような要を得た解説をしている。（注１４）

「近世でも又今日でも、中南支、特に南支の農村に見られる同族部落の械闘は、族的結合の強さの表示でもあれば、或意味での孤立封鎖性の徴験でもある。部落間の争に就いては、官憲に提訴する途が全然ないのではないが、由来、官憲によっては公正妥當な解決が與へられないのが例であったから、かかる提訴を好まなかった。そして少なくとも第一次的には、自ら實力的に解決せんとする方途が往々選ばれた。所謂械闘は、衆を聚め、械即ち刀・銃などの武器をとって闘ふこの實力解決の手段である。」

要するに「械闘」については（１）血縁によって結ばれている同族集団がその主体であり、（２）かかる２個の同族集団が武器をとり実力に訴えて闘うものであり、（３）特に華南の広東省、福建省に多く見られる、ということが上の説明から分かるだろう。（注１５）

台湾における分類械闘の種類を大別すると、匪徒粤族争闘から、閩族の中での漳州、泉州の争闘、或は、出身地を異にする同郷集団の争い、同姓を中心にした氏族の争い等、大小の差こそあれ、いろいろな系統に分けられている。清朝の各省でも、こうした分類械闘が実際発生したことが少なくなかったが、台湾ではこのような事件がとりわけ頻繁に起り、その範囲や程度が中国の各省を凌ぐために、「分類械闘」は清朝統治下の台湾における特殊な社会現象を表す名詞となった。

それでも、オランダ時代から康熙中ごろ（１７世紀）までは、移住民の数に比して土地が広かったので、目立った争いはなかった。移住民は同郷者や同姓を頼って落ち着き先をみつけるのが普通で、働き手が足りなかったことから、古参者は新参者を歓迎もし、面倒もみた。康熙中ごろ以降、密航移住者が急激に増えるに従い、土地争いは漸く深刻化した。

対立の最も甚だしかったのは、閩南人と客家人で、これに慣習や言語の著しい差異が拍車をかけた。

次が同じ福建系の中で二大勢力を占める漳州系と泉州系の間での械闘であった。規模の小さいのは、同姓の間でも見られた。客家系と争う時には、漳州

系と泉州系の福建系は団結し、漳州系と泉州系が争う時は、客家系は魚夫の利を占めた。時には高砂族を味方につけて、三つ巴、四つ巴の闘争を繰り広げた。

このもっとも典型的な例（注１６）が、宜蘭地方における開拓の過程に見られたそれである。１７９６年（嘉慶元年）、泉州系の呉沙は清官から特許を得て、三籍の流民を招募して開拓を始めたが、呉沙が漳州系であった関係で、応募した流民は漳州系が千余人、泉州系は２００余人、客家系は僅か数十人にすぎなかった。土地の分配で、自然、漳州系は優先権を持ち、泉州系は申し訳程度、客家系は全然もらえなかった。泉州系と客家系はこれを不満として官に訴えたが、官は嘴を插むことができない。

１８００年頃、泉州系と客家系の間で衝突が起り、泉州系には死傷者が多く出たため、土地を棄てて逃げ出そうとした。漳州系はこれを引きとめ、別に１人４分３厘（１０分で１甲）の土地を与えて慰めた。１８０６年（嘉慶１１年）、台北方面で漳州系と泉州系の衝突があり、負けた泉州系でこの地方に逃げ込む者が多く、土地の泉州系はこれをかばって、漳州系に復讐した。この時、かねてから漳州系の横暴を恨んでいた客家系とアリサイ社番も、泉州系の味方をしたが、漳州系に勝つことができず、結果は折角の土地を取り上げられてしまった。

台南の俗諺に、「蔡抵蔡、神主槓槓破。陳抵陳、挙刀仔相残」（注１７）というのがある。「蔡と蔡と出会えば位牌も木葉微塵、陳と陳が出会えば、互いには斬合い」の意味で、同姓間でも利害が一致しなければ、血の雨を降らすという、もう一歩深刻化した分類械闘の姿を諷刺している。

今の人から見て、最もつまらなく思われるのは、西皮と福祿の衝突である。（注１８）これは始祖の楽器を異にする民間楽器の二つの流派が、ただそれだけのことで喧嘩をするのである。西皮がはやる甲の村には、福祿は影も形も見られず、福祿のはやる乙の村では、西皮はいち早く逃げ出すという始末である。

清官は、分類械闘を鎮圧する力を持たなかった。分類械闘が官に対する反乱に発展するのを警戒するだけであった。実際、分類械闘が反乱に発展するケースは極めて多かった。ワイロをもらった清官が、一方に加担するからである。しかし、反乱になれば、清官は公然と「義民」を募って当たらせた。反乱軍が福建系の時は、義民は客家系であり、漳州系の時は、義民は漳州系もしくは客家系であり、移住民混合軍の時は、義民は高砂族であった。義民の本質は奉公にかこつけて、私利を計る対立者であったといっても過言ではない。

閩客の分類械闘はとても複雑である。その原因として一つ考えられるのは、表面的な理由でよく言われるものであるが、お互いに言語、信仰、結婚や葬式の習俗などが、全く異なるからである。しかし、そのような事だけではなく、さらに政治的、経済的、社会的と文化的な要因が含まれていると考えられる。

以下、閩南人と客家人の「分類械闘」の発生原因を四つに分けて詳しく分析したいと思う。

第２節　政治的な原因

（１）消極的な清政府

清国は２１２年にわたって台湾を領有したが、１８７４年までの約１９０年間は、政治は腐敗し、軍紀はないに等しく、消極的な経営であった。その経営の基本方針は台湾が再度、盗賊の巣窟と化し、反政府勢力の根拠地となることを防ぐことに重点がおかれた。しかし、清国政府が台湾経営に消極的であっても、福建南部（閩南）や広東東部からの移民の流れを止めることはできず、農業を中心に台湾の開発は着々と進んで行った。

清国政府は台湾の領有を決定すると、台湾と澎湖列島を福建省の管轄下におき、厦門と台湾を管轄する「分巡台厦兵備道」を設け、鄭氏政権時代の承天府を台湾府に改め、そのもとに台湾、鳳山（鄭氏時代の万年州）、諸羅（同、天興州）の三県をおいた。分巡台厦兵備道は軍事および行政を管轄するが、軍事力の行使による治安維持に重きがおかれていた。清国政府は台湾の官吏と部隊による反乱の防止にも腐心し、台湾に赴任する官吏の任期を３年とし、任期が満了すればただちに中国に転勤させ、家族の同行も禁じた。また、各地に駐屯する、総数約一万からなる陸軍と水軍の部隊は３年ごとに移動させた。これを「班兵制」といい、台湾現地からの募兵を禁じた。いずれも長期に駐在することによって土着化し、台湾住民と結んで反乱を起こすことを恐れたからである。

清国政府は鄭氏政権を降伏させると、早々に移住民一〇数万を中国に強制的に引き揚げさせ、台湾は「人去業荒」の状態と化したが、なお残留の移住民に対処するために、「台湾編査流寓則例」を布告し、全面的な人口調査を行なった。そして残留の移住民のなかで、妻子や生業をもたない者は、ただちに中国の原籍地に送還し、妻子や生業をもち、引きつづき台湾での居住を望む者には、原籍地の官庁に申請させ、分巡台厦兵備道が審査した。犯罪者は妻子や生業の有無にかかわらず原籍地に送還して裁き、台湾への再渡航を禁じることにした。台湾領有の決定とともに、台湾への渡航は認められることになったが、厳しく制限された。清国政府は三ヵ条の渡航限令を布告した。「三禁」（注１９）というのは、

１）　台湾に渡航せんと欲するものは、先ず原籍地の照単（身分証明書）を給せられ、分巡台厦兵備道（台湾方面警備司令部）の調査を受け、か

つ台湾海防同知（海軍司令部）の審験によりてこれを許す。潜渡（密航）するものは厳罰に処す。

２）　台湾に渡航するものは、家眷（家族）を携伴するを准さず。及び既に渡航するものも、これを招致するをえず。

３）　粤地（広東東北部）は常に海盗の淵叢（巣窟）となり、積習いまだ脱せざるをもって、その民の渡台を禁ず。

ここに特に注意を要するのは、三禁の最後の項の客家に対する差別待遇である。一説に、これは施琅の私恨に出たものという。施琅は福建省晋江県の出身で、潮州地方の客家で、海賊となり、後に鄭軍に加担したものと戦い、しばしば苦杯をきっしたのである。後に「三禁の制」が緩和された時、多くの客家人が渡台するのであるが、やはり先住の福建系移住民らとさまざまな摩擦を起すことになる。

（２）無能官吏たちの姿

清朝の消極的な統治は、諸羅県（現在の嘉義）や鳳山県（現在の高雄一帯）の高級役人たちが任地におもむかず、台湾府（現在の台南）でとぐろをまいていたように、当初から台湾の官界に弛緩をもたらしていた。役人たちの任期は３年であったが、彼らの間には「三年官二年満」といった諺が流布されていた。３年のところを、うまくやって２年でもとの福建省に帰ろうというのである。

福建といえば大陸本土でも中原から遠く、辺境の貧困にあえぐ地とされ、官吏たちはそこへの任官を嫌っていたが、台湾はそこよりさらに僻地とされている。その台湾に派遣されることなど、官吏としてはよほどの貧乏クジだったに違いない。

その台湾府の官吏たちを取り締らなければならない福建省の巡撫（総督）においても、現地を視察することはなく、すべて出先の官庁まかせで表面上の太平をよそおっていた。

軍隊も文官同様に３年交替で本土の福建から派遣され、その多くは淫売窟やアヘン窟に入りびたっていた。また、その軍隊は台湾現地で補充されることはなかった。“官”が移住民たちをいかに信用せず、保護するのではなく統治.警戒しなければならない対象とみなしていたかが、このことからも分かる。無論、移住民たちも“官”をそのようにみなしていた。

「衙門八字開、無銭不免来」（注２０）

このような言葉が、移住民たちのあいだでささやかれていた。衙門（役所）の扉は八の字に開かれてはいるが、無銭（金のない者）は来ても仕方がない、と

いうのである。

官吏たちが被統治者たちから賄賂を取り、金を貯めこんで一日も早く福建に帰ろうとしていたサマがうかがわれる。

大がかりな武力蜂起や騒擾事件の多くは移住民によるもので、清国政府の貪官汚吏に対する不満が主な原因となっている。台湾に派遣される官吏は、概して優秀とはいえず、俸給も低かった。領有当初の分巡台厦兵備道の道台（長官）の年俸は銀６２両、各県の知県（知事）は２７．５両で、兵士の月給は衣食住つきで銀２両、年俸にして両２４両であった。これを見ると官吏の給与が、いかに低かったかが分かろう。そのため官吏の汚職や賄賂の横行は日常茶飯事であり、住民を苦しめた。官吏の給与を低く抑えたことに起因する、汚職や賄賂の悪習は中国の伝統ともいえるが、台湾における官吏の腐敗は、極端に深刻であった。台湾の官吏に清廉潔白を促し、給与の改善をもはかるため、１７４３年から「養廉銀」（養廉費）を支給するようになった。しかし、養廉費を支給されても、官吏の汚職や賄賂の横行はいっこうに減らないどころか、はびこるばかりであった。兵士もまた班兵制のもとで士気に乏しく、バクチや遊興にふけり、小遣い稼ぎに精をだす者も多かった。

武力蜂起や騒擾事件のなかでも１７２１年の朱一貴の事件、１７８６年の林爽文の事件、１８６２年の戴潮春の事件は、清国統治下の台湾三大「事件」といわれている。朱一貴の事件は（注２１）、７日間にして台湾全域に広がり、明王朝の再興をスローガンに、国名を「大明」、年号を「永和」と定めて、一年近くにわたって各地で戦闘を繰り広げたすえに鎮圧された。林爽文の事件（注２２）も政治的な性格をもち、明王朝の復興を掲げ、年号を「順天」と定めて、蜂起は１年余におよんだ。林爽文の事件を境に、その後の蜂起や騒擾事件は経済的な性格が強くなり、全島的な規模には発展しなかった。戴潮春の事件（注２３）も同様であり、台湾中部を中心とした３年近くにおよぶ攻防であった。これらの事件の鎮圧には、台湾に駐屯する部隊だけでは手に余るものがあり、ほとんどが中国本土からの精鋭部隊の応援を必要とした。

支配者の分裂政策は殖民地統治にはつきものの常套手段である。開拓者同士の対立反目は、支配者が漁夫の利を占め得る好機であり、それを見逃すはずがなかった。清朝はこの分裂政策を公然、かつ積極的におこなった。ところが、清朝の台湾における政治力が不充分なため、分裂政策をとるのはよかったが、時には薬がききすぎて、開拓民同士の抗争が激烈になってくると、政府の力では鎮圧できないほどの大擾乱に発展することがあった。

この場合政府は、一方を「匪徒」、一方を「義民」として、弾圧と支援を併

せ用いて局面を糊塗するしかなかった。匪徒にされるのは閩南人が多く、同じ閩南人のうちでも漳州系がよく匪徒とされ、義民の役は客人がよくひきうけた。

ところが、このように開拓民同士が骨肉相喰み、政府が匪徒と義民の名目をあたえて分裂を策するとき、義民とされた方が、往々にして権力と結托しては放火殺人や脅迫強奪をほしいままにし、一般開拓民から憎悪されることが多かった。「その名は義民でも、匪徒より悪虐なり」といわれてきたのがそれである。

（３）政治的な分類械鬪の例

１）　呉球の事件（注２４）

施琅の入台より１５年後の康熙３５年（１６９６年）７月２日、諸羅で大捕物があり、呉球以下６人の人物が捕らえられた。もちろんその場で殺された者が多い。呉球は、「滅清復明」を旗印に数十人の同士を指揮し、諸羅県庁を襲って台湾府に攻めのぼろうとしていた。一度起てば台湾府までの途次に道々の住民が蜂起軍に加わり、「滅清復明」軍はたちまちに膨れ上がるはずであった。ところが蜂起直前に計画が漏れ、大捕物となったしだいである。蜂起していれば、一時にせよ勝者となる素地は十分にあった。呉球の乱の際に、閩と客は一緒に清政府と戦った。

２）　劉却の事件（注２５）

呉球より５年後の４０年（１７０１年）１２月、劉却なる人物に率いられた一隊が「滅清復明」の旗をかかげ、諸羅県と台湾府の中間に位置する茄苳営（かとうえい）（現在の台南新営）を襲い、諸羅県と台湾府の連絡線を絶った。劉却はそこで一息入れ、兵を募ってから台湾府に攻めこむ作戦を立てたが、蜂起より５日目、準備の整わないうちに台湾府の軍と遭遇し、殲滅された。作戦のまずさである。逃亡した劉却はそれより約１年後に中部の笨港（現在の北港）で捕らえられ、呉球同様、台湾府で処刑された。劉却の乱の際にも、閩と客は一緒に清政府と戦った。

３）　朱一貴の事件（注２６）

台湾における閩南と客家の械鬪が最初にあからさまになったのは、１７２１年の「朱一貴事件」である。事件のそもそもの発端は福建、広東の移民による反清抵抗運動であった。福建出身の朱一貴と広東出身の杜君英は、最初、協力していたがやがて反目し合うようになり、杜君英が部下の客家人数万を引き連れて運動を離脱したためにお互いに争いが生じ、本当の敵はどうでもよくなってしまった。清の朝廷が派遣した福建省南澳総兵の藍廷珍が兵を率いて安平に

上陸すると、それを待っていたように、最初抵抗勢力に加わっていた広東出身の客家の村のいくつかが寝返って「大清」の幟を掲げ、清軍の朱一貴一派の鎮圧にすすんで協力した。こうして福建、広東の反目はさらに深まり、それ以後広東出身の客家人は「民変」が起きると常に「義民」と称し、自分たちの利益を守る一方で、閩南人に報復した。その後清朝が統治の便のために両者の矛盾をよく利用した。

（４）「六堆」

台湾における客家の自己意識が最初に顕在化するのは、清朝の朱一貴の反乱が契機であったと推測される。朱一貴は漳州を祖籍地とする家鴨飼いであったというが、この年に反清復明の反乱を起こし、台湾全土を占領した。この際、台湾中南部の広東籍住民のうち、福建方面からの移民はその方言が漳州と泉州と通じたため朱一貴についだが、広東方面の嘉応州および汀州からの移民は方言が異なったので加わらず、郷勇を組織して清朝側に協力した。このときの軍事組織が、台湾南部の屏東県周辺の「六堆」となったといわれている。反乱ならびにその鎮圧に際し、客家系住民と閩南系住民の間に械闘が生じ、南部の客家系住民は集団化して自衛しなければならなかったのである。
「六堆」は六つの「堆」の連合組織で、各「堆」はさらに六つの「旗」に分かれ、各「旗」は５０名の壮丁からなっていた。平時は農作業に従事し、一旦事あれば軍事行動を行った。費用は住民が全て負担したという。「堆」は「隊」の同音ともいわれる。民間の軍事組織であると考えられる。

（５）政治における影響

１）統治者は、意図的に移住民の間の矛盾と衝突を利用して、社会の団結を阻害する分裂政策を進め、間接的に「分類械闘」を一層助長させた。
２）清朝政府おける文武官吏が腐敗している上、社会が常に無秩序の状態に置かれていたために、脆弱な合法的統治権力の裁判を求めるよりも、むしろ即効性のある私闘を選んだ方が問題解決の方法としては明快であった。そのために、民間に銃器が普及してくるにつれて、徒党を組んで争うようになった。
３）清朝政府における文武官吏が腐敗の原因で、民間では政府にたいして不信感、不安、不満、抵抗感をもって対立するようになった。

第３節　経済的な原因

広東省東部は「客家」と称される人々の多く居住するところで、渡航制限令

の「広東省（東部）は海賊の巣窟」云々は、施琅が客家に偏見をもっていたことから設けられたとの説もある。これが原因で客家の台湾の移住が閩南の泉州や漳州のそれに比べて、大幅に後れをとったことは確かである。閩南は渡台の時期が早く、人口も多く、開拓地も必然的に一等地を占め、概して富裕であったから、各時代とも優勢を誇ってきた。これに反し、客家は渡来の時期が遅れ、人数も少数で、開拓地も自然と山間僻地にかたより閩族に比べ総体的に貧しく劣勢の側にたたされた。したがって、閩南人は多数横暴の傾向を持つのに対し、客家人は、時の権力者に接近して遠交近攻のごとき対抗策をとる傾向があった。また、経済的原因としては、主に土地の利権、農地の灌漑水利、及び商売の利益などをめぐる対立から械闘するようになっていた。

（１）経済的な分類械闘の例

１）漳泉客の分類械闘

この私闘は、台湾府のおかれていた南部よりも、清朝の統治権が希薄で移住民が比較的自由に入植できた北部において、いっそう顕著であった。北部の開拓史は、同時に閩客分類械闘の歴史でもあったといえる。ここで数種の実例を見てみよう。（注２７）

北部太平洋側の宜蘭地方に入植が始まったのは嘉慶元年（１７９６年）の頃で、呉沙という人物が台湾府の許可を得て大陸で入植者を募ったのが嚆矢とされている。先にも述べたように、この時呉沙が漳州系であったことから、漳州人の応募者は千余人を数え、泉州系は２００余人、客家系は数十人にすぎなかった。自然、土地への優先権は漳州系がにぎり、泉州は余ったわずかばかりの土地しか与えられず、客家系はまったくもらえなかった。そこで弱者同士である泉州系と客家系がかえって反目しあい、分類械闘にまで発展した。客家系はその団結力によって優勢をたもち、泉州系からは死傷者が続出し、土地を捨てて全員で逃げだそうとした。この時、械闘の一方が客家系であったことから、最大多数者の漳州人が泉州人を慰留し、この一件は表面的には落着した。

ところが嘉慶１４年（１８０９）に台北盆地に入植していた漳州系と泉州系との間で分類械闘が発生した。盆地中央部の艋舺（現在の台北万華）を中心に一帯は騒然となり、敗れた泉州人の多くが台北盆地から離れた宜蘭地方に逃げ込んだ。宜蘭地方の泉州人たちは同族の増えることを喜び、それらを歓迎し、よく面倒も見た。そこで彼らは避難民となって来た同族から、台北盆地での漳州人の“横暴”を聞くにおよぶ。かつては自分たちを慰留してくれた漳州人ではあるが、今は彼ら泉州人たちの漳州人への怨嗟の念は募るばかりであった。その念の昂じるところに、宜蘭地方における新たな分類械闘が起こった。泉州人の漳州人に対する報復戦である。が、衆寡敵せず、この時客家系も漳州人に一矢を報いるため、かつての怨念を捨て泉州人の側に立ったのであるが、やは

り、この地においては数を擁する漳州系に敗れ、泉州人、客家人たちは土地を取り上げられ、宜蘭の地より追い出されてしまった。

盆地中央部の艋舺方面の開拓は漳泉の福建系が先鞭をつけ、そこを勢力圏としたのであるが、その周辺の新荘（現在の台北県新荘）、秀朗（同、永和鎮）、内湖（同、内湖郷）方面は客家人を含む広東系が拓いたところである。その相互の開拓地が広がるにつれ、両者の利害は衝突するようになった。道光２１年（１８４１年）、ついに台北盆地全域の耕作権をかけ福建連合対広東連合の分類械闘が発生した。結局は福建系の大勝であり、広東系は中壢（現在の桃園県中壢鎮）方面へと逃げ去り、台北盆地全域で広東人の集落はまったく姿を消した。

話はさらに続く。台北盆地を占めた福建系であるが、その勝者同士で第２回戦が演じられた。すなわち慣例ともなっていた漳州系と泉州系の械闘である。それは３年後の道光２４年（１８４４年）に発生した。

不穏な空気が流れ始めると同時に、各集落では女、子供、老人も総出で村の出入口に土角（泥を固めたレンガ様のもの。普段はこれを積み上げて家の壁とする）を積んでバリケードを築き、そこを村の壮丁たちが青龍刀や鎌、鍬を持って警護する。やがて双方から斥候が出され、小競り合いが演じられ、そして集落をあげての破壊、殺傷戦へと発展していく。それを仲裁する勢力、つまり公権力の介在がそこにはないのである。“自由の天地”であったがための悲劇であろう。

この時の分類械闘では、先の宜蘭平原の時とは反対に泉州系が優勢勝ちとなり、台湾史における大富豪として有名な林本源が新荘から板橋（現在の台北県板橋市）に居宅を移したのはこの時期のことである。林本源家は漳州系だったのである。

表１：分類械闘で閩客の遷移（注２８）

	集団グループ			合計
	漳籍	泉籍	客家	
乾隆朝	5	2	14	21
嘉慶朝	4	6	3	13
道光朝	6	9	14	29
咸豐朝	2	3	2	7
時間不詳	1	2	3	6
合計	18	22	36	76

（２）経済における影響

１）械闘は発生後、各籍人は地界を限り、お互いの地域は往来を禁止。そういう行為のために当時の台湾島内の交通網が発達しなかった。
２）械闘の双方は、勝つために、大量のお金をかけ、兵馬を招く、実力を貯える等、過度の支出に苦しんだ。例えば（注２９）同治７年、雲林県に廖、李、鐘という三大姓があったが、それが李鐘両姓連合対廖姓の械闘を起した。結局は廖姓の大勝となり、李鐘両姓が敗れ、頂店、新庄などの地より追い出されてしまった。他方、勝方の廖姓も破産してしまった。

第４節社会的な原因

（１）女性が少ない社会の気風

早い時期の移民は妻をとどめておくことが許されず、新しい移民は妻を伴って来ることはできなかった。中国大陸から台湾へ女性が始めて移住してきたのは１６４８年になってからであり、もともと女性は極めて少なかった。
１６８４年から１７８８年までの百年余の間は、十年間を除き９０年余の長きにわたり妻を伴って台湾に渡ることが許されず、台湾の人口構成が甚だしくバランスを失するほどに女性が不足した。
１７２１年の時点で台湾全土の漢人人口はすでに２６万を数えたが、府都の旧移民のごく一部に妻を持つ者がいた以外は南北数百の村のどこへ行っても男ばかりで、女性は千人もいなかった。古今内外に珍しい現象である。

諸羅県（現在の嘉義）の町から５０里離れた大埔庄（だいほしょう）の場合では、１７２１年の全村の人口２５７人のうち女性はたった一人、男のうち６０歳以上の者も一人のみ、１６歳以下の者は皆無という記録がある。（注３０）
清の初期に女性の移住を禁止したことは、台湾の社会に深い大きな影響を与えた。大勢の移民男性は、妻を持って子をなし所帯を持って落ち着くことができず、かといって故郷に戻ることもできなかったために、精神状態は不安定になり、さながら水に浮かぶ浮き草のごとくであった。
こうした流動状況を端的に表わしていたのが、台湾の人口構成上のもう一つの特色である遊民、俗称に言う「羅漢脚」である。１８世紀のある地方志にはこんな記載がある。「台湾には、土地も家も妻もなく、知識人でも農民でもなく、ものを作りも売りもせず、運輸をなりわいにするでもない者で、俗に羅漢脚と呼ばれる人たちがいる。女郎買いと博打と盗みに明け暮れ、徒党を組んで争いをし、浪費と無為に日を過ごす。なぜ羅漢脚の名がついたのか。気ままにぶらぶら遊び暮らし、どこへ行っても徒党を組み、身なりは締まりがなく、いつも裸脚でいるからだ。」

羅漢脚の中には、福建・広東にいたころから正業を持たない者もいれば、台湾に来てから失業した者もいた。こうした人種は台湾社会の底辺には常に存在した。

推計では、１８世紀半ばから１９世紀初めころまでの台湾では、全人口に占める遊民の比率は２０％から３０％、実数では１３万人から５７万人ほどにもなった。遊民たちは台湾社会のすさんだ気風を助長したが、彼ら自身の境遇や行く末もますます悲惨になってゆくことが多かった。民族研究家の仇徳哉が書いた『台湾の寺と神々』（注３１）という書物にはこうある。

「大衆爺は別称で大将爺とも聖公とも呼ばれ、いずれも不特定多数の寄る辺なき亡霊として祀られたものである。この種の信仰が生まれた背景を考えるに、福建・広東から開拓のために台湾に渡ってきた移民はたいていまず裸一貫各地を渡り歩かねばならず、他郷に肉親はなく、加えて苛酷な風土で悪疫と戦わねばならず、時には争いが起き、原住民との軋轢も多く、川や谷で行き倒れても誰と見分けてくれる人はなく、見しらぬ土地に埋められれば風雨に打たれるが、屍を人目にさらさねばならない。心ある人がその骨を拾い集めて祠を建て、大衆爺の名で祀ったのである。このような廟は４０個所に及ぶ」

この種の廟は「有応公廟」とも呼ばれ、「万善同帰」（注３２）の字が記されていることもある。ここに挙げられている「４０個所」というのは県や市の役所に登録されているもののみであり、実際の数はとてもこの程度にはとどまらないであろう。

いつのころからか、台湾では「搶孤（チャングー）」（注３３）という習俗が広まっていた。冥界の門が閉じるとされる陰暦の７月３０日、にわかづくりの小屋をしつらえ、供え物を垂れ下げ、俗に「良き兄弟たち」と称されるさまよえる孤独な霊魂を慰めるのである。「若いころ無茶をやっても路傍の万応公になれる」という賛美半分の言いならわしも、民間に伝わっている。

今日の台湾社会に見られる命がけ好きの風潮の中には、その起源が清代の台湾社会に求められるものが多い。２００年続いた地方官による統治と軍隊式規律も、こうした風潮の形成を助けた一因であった。

清朝の台湾経営が積極的政策に転じるまでは、渡航制限によって移住民のほとんどは単身男子であった。「羅漢脚」である。単身男子移住民と先住民の交流や通婚は禁止されていたが、現実には多く行われていった。そのために台湾には「有唐山公（こう）、無唐山媽（ば）」（注３４）の諺がある。唐山は中国、公は祖父、媽は祖母を意味し、台湾には中国人の祖父はいても中国人の祖母はいない、つまりそれほど先住民女性との婚姻が多かったことを物語っている。当時、移住民は単身男子ばかりの状況にあり、つまり男多女少である。その単身男子は「羅漢脚」と呼ばれ、その時代も羅漢脚の世界である。彼等は義兄弟の契りを結ぶ

ことで、清国政府に対抗すると同時に無聊（ぶりょう）を慰め、家族的な団結を強めることができ、異郷の地に生きる方途として、経済的にも社会的にも助け合ったのである。

（２）社会的な分類械鬪の例

１）　天地会

鄭氏政権崩壊後に顕在化した秘密結社である、「天地会」の存在がある。天地会は政治的には異民族である清王朝の打倒と、漢民族である明王朝の再興を目指し、経済的には孤立無援の移住民の互助を目的とする民間組織である。

天地会の名は、「天地を父母とし、盟員は兄弟」（注３５）とするところに由来し、入会はお互いに血の杯を交わす「歃血為盟（そうけついめい）」「飲血為盟（いんけついめい）」の儀式によって認められる。当時、移住民は単身の男子ばかりの状態にあり、義兄弟の契りを結ぶことで、清国政府に対抗すると同時に無聊を慰め、家族的な団結を強めることができ、異郷の地に生きる方途として、経済的にも社会的にも助け合ったのである。清王朝に反感を抱き、「血で固められた」集団だけに、いつどこで決起しても不思議ではなく、いったん事あればたちまち燎原の火となり、清国政府を脅かした。天地会の初期の活動には、政府的な動機が強く見られたが、次第に薄れ、相互扶助の性格が顕著となって行った。移住民の増加とともに盟員も増え、やがて移住民の原籍地ごとの組織に枝分れした。朱一貴の役や林爽文の役において、彼らが短時間に台湾全域を席捲した背景には、天地会の組織的な動員力があり、また、失敗の一因には、閩南人と客家人の反目があった。いわゆる「分類械鬪」の問題は、ここに絡んでくる。

２）　林爽文の事件（注３６）

１７８７年～１７８８年台湾でおこった事件。林爽文の原籍は福建省であったが、１７７３年（乾隆３８年）父に従って台湾に渡り彰化県（現在の台中県）大里杙（よく）に住む。県の捕役などをしたが、１７８３年（乾隆４８年）に同郷の厳煙が渡海して彰化に布鋪をひらき天地会を伝えたのに入会し、１７８６年（乾隆５１年）には当地の会首となった。１７８６年台湾知府孫景燧らが謝羅県（現在の嘉義県）の天地会を弾圧したのを契機として、同年末、林爽文は１０００余人を率いて大里杙に反乱をおこした。林は彰化を占領したのち「順天盟主大元帥」となり年号を「順天」として政権を樹立し、台湾西部のほぼ全域を勢力下におさめた。漢族・非漢族あわせて数十万人が加わり清代を通

じて台湾最大の事件となったが、内部の郷里意識の対立もあって、清朝が福康安を派遣し鎮圧させると各個撃破され１年２カ月余りで終息し、林は１７８８年（順天３年・乾隆５３年）北京で処刑された。この事件の社会的背景には、鄭氏政権下の「官田」が清朝の統一後，官僚・地主の大土地所有の対象とされ重層的で複雑な土地所有関係を形成していたこと、正税のほかにも「蕃銭」などと呼ばれる多くの付加税を徴収されたことがあげられ、官僚機構の腐敗が民衆の反抗を生みだしたといえる。さらに中国大陸からの大量の人口流入が上記の問題をより顕在化したという面も否定できないと思われる。

（３）社会における影響

１）清朝初期の台湾社会は依然移動開墾的な原始的な社会形態であって、なかなか法治的、文明的な社会に入れなかった。

２）長い間台湾の住民の大同団結を妨げるがんとなっていた。現在でも、一部には姓によって縁組を忌避する風習がある。理由は先祖代々の遺言によるという。子々孫々にいたるまで倶に天を戴かずという先祖の凄まじい怨念が未だに生きている感じがする。今に後遺症を残すほど激しい相克であったとも考えられる。

３）人々が離散流動して定住すべき場所がなく、帰るべき家がないという状態は、大きな社会問題になった。

４）分類械闘も人口移動の原因となった。例えば（注３７）台北盆地の中心部を開拓したのは漳州、泉州を中心とする福建連合であったが、その周辺に客家系を中心とする広東連合が入植し、両者に対立が生じた。そこで全台北盆地の耕作権をかけて福建連合対広東連合が合戦し、敗れた広東連合は南へのがれ、台北盆地から客家人の姿は消えた。そのあと勝った側の漳州系と泉州系が争い、泉州系が勝って盆地の中央部を押さえ、敗れた漳州系はかつて広東連合が拓いた盆地周辺にのがれ、防備を固めたからである。ちなみにこの戦いは、道光２１年（１８４１年）から同２４年にかけてのことである。

第５節　文化的な原因

１７世紀末以降、群れをなして台湾に移住してきた漢民族は、閩南と客家の、二つのグループからなっていた。閩南の母語は閩南語、客家の母語は客家語であったが、閩南語と客家語では、お互いの意思の疎通が全くできないくらい語彙や音韻体系が異なっていた。

閩南語にも漳州方言と泉州方言があり、多少アクセントが異なっているが、

意思の疎通に支障をきたすほどの違いはない。閩南と客家の文化には、言語をはじめ信仰、年中行事、結婚や葬式の習俗、住居、衣服（図１５）など、さまざまな点で大きな違いが見られた。以下に、それが原因で分類械闘になった例を三つ出したいと思う。

①　李通の例（注３８）。道光６年（１８２６年）に閩南人の李通は客家人の黄氏家の豚を盗んだ事件が発生し、閩客双方械闘になった。

②　南路の閩客械闘（注３９）。光緒元年（１８７４年）に南路で起きた閩客械闘の原因は単純な閩客の牧童の喧嘩であったが、７ヶ月の械闘になった。

③　発生年代は不明（注４０）。客家人の村の住民が徒党を組み、白昼で閩南人の村の牛を盗み、自分の烙印を押してごまかした。もし牛が客荘へまぎれ込んだら最後、誰もあきらめざるをえない。下手に争うものなら、牛をすり換えられた上、あべこべに縛られて、牛ドロボーとして突き出される。官は曲直を弁ずることができず、その詐術にひっかかる。それが原因で閩客械闘になった。

また、閩客の言語の場合の例としてあげるならば、日本語で「ありがとうございました」というところを、閩南語は「 多謝你 」と言い、客家語では「承蒙你」である。二つのグループの言語が全然といってよいほど違う。お互いにまるで外国語のように聞こえるに違いない。

宗教信仰に関して言えば、閩南と客家は、それぞれ地域的に集中して居住する傾向があった。閩南は主に天上聖母（媽祖）、客家は主に三山国王と呼ばれる神を自分たちの守護神として廟（ミャオ）に祀り、この神をグループ統合の象徴とすることが多かった。

（図１５）

また、女性の場合は纏足（てんそく）（小さい頃から足の先を裏に曲げて、長い布を巻きつけ、足を大きくさせないでとがらせる）がある。閩南人女性の間では纏足の風習が流行っている。かわいい小さな足が美しいとされたからである。閩南の女性は纏足の習慣があり、伝統的には屋内の仕事だけを分担し、髪も低髻の「亀仔頭（クウアータウ）」（注４１）を結う。これに反し客家の女性は労働に従事していたため、足についての美の観念を変えることなく、自然のままの足を美しいとした。このため纏足をしない自然の足を美しいとする生活様式と風習を保ち続け、そのことが客家女性に見られる大きな特徴であるとされた。纏足の習慣がなく、髪の形は高髻（こうけい）にして、金銀の簪（かんざし）も衣服も長衫（ツオンサム）（注４２）などと客家語で呼んでいる閩南の女性とはかなり違うものをまとった。また、閩南の服装は非常に長く、着丈の７分位の所まで上衣をつけ、年齢の増加につれて長くして行き、褲は必ず黒いものを用いている。履物は主婦の手によって作られ、スリッパの形をしていて、表は黒地に金、銀系等で美しく刺繍されてあり、底はスリッパの底の様なもので、厚く、しかも堅く重ねて強くとじつけたものを用い、優美でしかも耐久力があり、外出時にのみ用いた。日常は素足である。

男性の嗜好で見ると、閩南に檳榔樹の実（一種のかみ煙草）をかむ風があるが、客家にはその風をたしなむものは少ない。当時、食生活において、閩南人は、朝、粥を食べたが、客家は三食ともご飯である。大体においてご飯の炊き方は湯取方が多く、湯が沸騰したら、必要な分だけ米粒をすくって蒸らし、残りは粥か重湯として食べたり飲んだりする。戸外労働をする人はご飯、女子供は粥という合理的な食習慣である。副食、味付けの好みも歴史的な背景と居住環境の違いにより当然異なる。

伝統音楽は、まず民謡について述べるが、大別して閩南の民謡と客家の民謡がある。後者の方が前者よりもバラエティに富み、なかんずく茶摘み歌は有名である。七言一句が最も一般的な形式で、歌詞の内容は男女のたわむれや愛に関するものが多い。南部の客家より北部の客家の方が盛んである。

また、楽器及び歌曲との合奏には南管と北管とがある。南管は閩南の室内楽で、明初に廈門や泉州一帯に発生したもので、優雅な曲調で合奏したり、または独唱を加えて合奏を楽しむもので、往時においては地方の紳士淑女がこれをたしなんだという。主に使われる楽器は、琵琶、洞笛（尺八に似た縦笛）、胡弓、三弦（三味線に似たもの）、拍子木等である。それにひきかえ北管は主に庶民、特に農民たちがこれを好み、南管とは正反対で喧騒または豪放そのものであり、閩南以外に客家にも愛好されている。主要楽器は、大型のドラ、各種大小シンバルや太鼓、数本の哨吶（チャルメラに似たもの）等大きな音響を発するものが多い。楽器合奏はその外に８音・１０音・１３音等があり、８音と１０音は主に冠婚葬祭の時に演奏される。芝居は１９４５年までは高甲戯・梨

園戯、北管戯、白字戯、客家の採茶戯等が盛んであったが、その後新たに起きた歌仔戯の出現によって、北管戯がまだ僅かに余命を保っている外は、ほとんどが姿を消してしまっている。その外に布袋戯、皮影戯等の人形芝居や繰り人形芝居があるが、歌仔戯程には流行っていない。

（1）文化における影響

1）閩客の文化的対立のため、文化の発展は遅滞し、ますます衰退してしまった。当時の古廟と古住宅の建築防御工事は建築藝術に大きな影響を与えた。例えば台湾南部の屏東県周辺の「六堆」には周りが城になった。それは分類械闘の時、攻撃を防止するための防御工事としてほどこされたものである。

第６節　まとめ

原籍地が異なるごとに群れ集まりお互いに武器をもって争う「械闘」は、清代を通じて台湾の深刻な社会問題となった。同じ傾向はもともと福建南部や広東にもあった。

ただし、台湾の「械闘」には福建南部や広東と比べてもはるかに複雑な要素があった。当時の清政府は「籍貫」（原籍）を重視し、民衆は「他省に移住してはならない」とする規則を定め、科挙の制度にしても省ごとに決まった定員を設定して、必ず原籍地で受験することとした。このため、各省の民衆はみな強い「籍貫」意識を持つようになった。

施琅の死後、客家人の移民制限が緩和され、台湾に渡る人は激増した。１７８６年になると、全台湾で「１０人のうち泉州・漳州出身者が６、７人、広東出身者が３、４人」と言われるようになった。こうして台湾の島を二つの省から来た移民で占めるようになっても、お互いに言語が異なり、誤解が生じやすかった。

住み慣れ土地を離れようとしない中国の民衆が、あえて故郷を離れ風波の危険を冒して海を渡った先に生活の道を求めるには、果敢で勇を好む性格が具わっていなければならない。女性が極端に少なく若い男ばかりのこの土地では、妻を得て子をなすことは不可能であり、安隠な生活など期待しようがなかったから、移民たちは家族を思う気持ちも家族倫理の束縛もないまま、感情のおもむくままに向こう気を競い、賭博や女郎買いやアヘンなどの悪習に染まりやすかった。この社会には不合理が横行していたこともあり、悶着が起きれば暴力で片付けようとした。したがって省の異なる閩南人と客家人の分け隔てが顕著になった。

以前は、軋轢のいい例として閩南人と客家人が結婚しようとすると、双方の親が反対するといったことが挙げられたが、現在、若い世帯にはそういうことは少なくなった。しかし、多数派集団・強勢集団（社会的に優位にある集団）である閩南人に対して、少数集団・弱勢集団客家は従属的な立場に置かれてきたし、現在も同様である。また、清朝からの閩客分類械闘の軋轢もまだ解消されていない。それに、若い世帯でも「親の背中を見て育つ」という言葉があるように、やはり閩南人と客家人の間には、微妙な認識の違いもある。日頃は問題がないようにみえても、選挙や金の貸し借りなど利害が関わる場面ともなると、若者であっても閩南人と客家人の対立が表面化することになる。今でも閩南人と客家人の間にはやはり抜きがたい不信感・対立が存在する。

現在、台湾の経済のますますなる成熟と、義務教育年限の９年化と教育の普及、海外との往来が盛んになったことなどもあって、新たに育った世代間から、通婚の阻害要因が徐々になくなりつつあると思う。清朝の分類械闘以来、続いてきた閩南人と客家人の反目、対立も、新しい世代では薄れつつあるとも聞く。閩南人と客家人の通婚もまた増えているという。

ちなみに、日本時代に入って、分類械闘はピタッと跡を絶った。理由は日本植民統治の初期、総督府は警察制度を確立し、保甲制度を警察の補助制度として利用することとした。その結果、細かな警察網が整備され、警備力も十分であったのみならず、警察の権限が日本におけるそれよりも格段に強化され、法律の執行や公共の秩序維持その他も、地方政府と協力して一般行政事務を処理するようになった。このため、警察は長期にわたって台湾社会を強力に統制することとなり、台湾人の日常生活を取り締まり、またそれに介入する人々に恐れられる行政権力となった。そうした状態のもと、台湾植民統治２５年後の治安の上でほぼ「夜不閉戸（夜、家の鍵を掛けずに寝られる）」という状態に到達した。そして、厳密に犯罪を防ぐため、民衆がいくらか注意するようになり、運良く法律の網をくぐるというようなことを考えさせないようにした。

他方、総督府は自らの権益に基づき、明治維新における法律改革の経験をもとに、近代ヨーロッパ的な法律を台湾に導入し、強力な近代国家の「法による統治」の権威をもって、専制的でありながら効率的である近代的な台湾の法律体系の樹立を進めた。それにより台湾は伝統的な中国の法制から近代西洋市民法制社会への転換を始め、学校や社会教育を通じて近代西洋法治観念と知識を教育し、秩序と法律を尊重することを教えた。日本植民統治の中頃、多くの日本の近代法が台湾において施行され、司法が独立性と公的な信用を確立させた。ある研究者は、日本植民統治期において台湾人が遵法の観念と精神を普遍的に身に付け得たのは、その要因を考察するに、初期には日本の権威や権力に抵抗することが出来ずに受け入れたが、その後に、日本の確立した近代的な法律体系と信用するに足る司法制度が台湾人にとっても好ましいものであることを台湾人自身が発見したためであると考えている。つまり、近代ヨーロッパ

の法律体系と司法制度も台湾社会に選択的に受け入れられていったのである。その結果、民衆が己の本分を重んじ、秩序を重んじ、規律を守る習慣を養い、法律を守る、という観念が確立されたのである。日本政府は清朝政府の消極的放任政策とは違い、台湾を積極的に経営し、清国時代の弊害を一掃したからである。

具体的には、台湾総督府は府立病院と上下水道を含む衛生医療施設の導入によって過去の「瘴癘」（風土病）や伝染病など劣悪な環境から生じた疾病を退治した他、蔓延するアヘン吸飲の漸進的終焉、社会治安における低犯罪率化、「分類械鬪」の紛争解消、旧来の汚職と腐敗の官吏の風紀を一新させ、廉潔かつ能率的な官僚システムを確立して、さらにより公正な司法裁判システムの導入、警察体系の社会基層への浸透などによって、台湾人民に安住し得る社会を提供した。

第三章　閩客の現状と意識現状

第１節　閩南人と客家人の現状

本省人の中で閩南語を話す閩南人口は約７４．５％、客家語を話す客家人口は約１３．２％。閩南人に比べるとする少数派であることはいなめない。しかし、台湾の北西部の桃園、新竹、苗栗県を中心とする客家が集中する地域は、新竹市などの都会を除き、どこへ行っても客家語が話され、生活習慣上なんの違和感もなく、来台以来のかわらぬ客家の世界が濃密に引き続き保持されているようにみうけられる。そうした中で、客家内の通婚はごく自然のこととして守られてきた。

ところが最近、客家人と閩南人との通婚がかなり見られるようになった。若者は兵役で台湾各地に派遣されるし、農業以外の職業に付くことも多く、また、教育の普及もあいまって生活領域が非常に広がったからである。客家人は元来閩南人より遅れて台湾に移住したので、主として丘陵地帯を開拓し、大部分が農業に従事してきた。それが現在では新竹が工業発展地区の中心となり、若年層の多くが労働者として働くようになった。閩・客による差異は少なくなってきたといえよう。

最近会った村（美濃）の若い夫婦は、客家の夫と閩南の妻の組み合わせで、たがいに母語では十分通じあわない。そこで国語として教えられた北京語が夫婦間で使われているという。

台北生れのＣさんの孫は、客家語が不十分で、客家語のみを話すＣさんとはうまく通じあわない。

このように客家独自の生活にも少しずつ変化があらわれて来ているのである。

（１）文学から見た閩客の現状

『貧しい夫婦』。作者の鐘理和は、１９１５年の台湾屏東生まれ。１８歳の時、家族とともに美濃に移住した。日本統治下の台湾に生まれ成長した彼の作品の題材は、ほとんどが彼の身辺の事柄や農村の生活模様であるが、戦後初期の台湾人の心像風景を描いた作品が多く、戦後台湾文学の先駆者といえよう。『貧しい夫婦』の主人公である「平妹」は、鐘理和の主要作品に必ず登場する人物であり、その原型は、彼自身の妻である。『貧しい夫婦』のなかの「平妹」は、病気で入院した夫の医療費や一家の生活費のためによく働き、女一人で家計を支えた。退院後の夫は体力が衰え、安定した収入が得られる仕事に就けないため、「平妹」は警察に捕まる危険を承知しながら、山の木材を盗みに出かける。作品全体の基調は暗くて哀しげだが、愛する家族のためにどんな苦難に

も負けず、ひたすら働き、強い生命力と包容力を見せる「平妹」には、感心せずにはいられないものがある。

『祖母の思い出』。これも鐘理和の作品であるが、客家人に嫁いだ先住民の女性「祖母」が主人公となっている。「祖母」が客家の家に嫁いでから自分の生活習慣を捨て、控えめに振舞い、客家に溶け込もうとする姿を、孫である「私」、つまり子供の視線から描き出されている。客家人女性を主人公に取り上げるわけではないが、客家の女性のあり方を側面から描いた作品である。

『伯母の墓碑銘』。作者の鐘鉄民は１９４１年の美濃生まれ、鐘理和の長子である。父親の影響を受けて作家の道を志し、鐘理和が没した翌年の１９６１年から作品を発表し始め、父親の作風を受け継ぎ、農村の事物をリアルに描写することで定評がある。この作品は、前半に「伯母」の気の強さ、とげとげしさを批判的な口調で描いているが、それらは厳しい世の中を生き貫く武器であることを、読者は文末において、物語の語り手で「伯母」に育てられた「私」と共に悟るであろう。一見きつい女性であっても、「伯母」はただ単に客家女性の強さを持っているだけではなく、心の中は、母性の慈愛に満ちている。

『燈籠花』。作者の呉錦発は、１９５４年の台湾高雄美濃生まれ。この作品は作者が二十代前半に発表した初期の作品であり、エスニックな記憶が完全に隠された客家の女性を直接に描いたものではないが、客家家庭の片鱗が感じられ、客家家庭における女性のあり方が伺える。

以上の作品を通して、「客家の女性」という像が大体できてきたと思うが、彼女たちを「剛柔兼備」、つまり強さと優しさを同時に備えていると評価できよう。客家の女性たちは客家としての強さと柔軟性を備えながら、女でもあり母でもあるために、より我慢強くたくましく生きてきたに違いないと思う。客家の女たちは台湾の客家文学を知るための恰好の資料になるだけではなく、客家の伝統と文化を理解する恰好の手がかりにもある。特に台湾の客家は複雑な社会的・歴史的問題を通じて、特殊状況の中で、自らの文化や伝統を守るために多くの難問を解決しなければならないのであるが、客家人作家が台湾文壇で収めた輝かしい成果は、客家文化の強い生命力を証明しているのではないだろうか。

閩南の郷土作家は黄春明（１９３９年～）、陳映真（１９３７年～）、李喬（１９３４年～）など。彼らの作品は台湾の郷土の現実の姿を誠実に描く。

「坊やの人形」。作者黄春明、１９３９年の羅東生まれ。郷土作家として有名な黄春明の小説を映画化した「坊やの人形」はニューウェイブの代名詞ともいえる。監督は侯孝賢。この作品は６０年代台湾の庶民の生活を描いている。

主人公は無学な若者。生計のため劇場サンドイッチマンとなり、道化の格好

で路上で広告板を掛けて歩く。妻は子供を抱え洗濯女で苦労。ある日マネージャーから映画の仕事を手伝ってくれと言われ、喜び勇んで自宅へ。道化姿の父を本物だと思っていた幼い息子は素顔の彼に驚いて泣き出す。

黄春明は台湾の現実に生きる庶民の姿を描くことによって、中国文学の亜流ではない本当の台湾文学を確立したといえよう。

（２）映画から見た閩客の現状

１）客家の監督

侯孝賢は１９４７年、中国広東省梅県の生まれ。幼少の頃台湾に移住した客家系の外省人である。同世代の多くの若手監督たちのような海外留学の経験はなく、台北にある国立芸術専科学院の映画演劇科を卒業し、７３年に映画の世界に入って以来、もっぱら製作現場で多くのことを学んできた。彼の作品には、台湾に生きる人々の日常生活のディティールを描くことを通して、その背後に存在する台湾の歩んで来た歴史の重みや複雑な社会状況を浮かび上がらせようとするものが多い。また、侯監督は、特に伝統的な文化や価値が残る田舎を題材として取り上げることを好む。故郷の山や川を一幅の山川画のごとく切り取ったロングショットの美しさは印象的である。

ここでは特に、侯監督の作品の中から、代表作の一つ『童年往事』を取り上げ、新映画の、台湾の人や社会の捉え方について、更に具体的に眺めてみることにしよう。

『童年往事』は、侯監督の少年期から青年期におけての体験を基にした、自伝的作品である。物語は１９４７年、広東省梅県の客家の家に生れた阿孝（侯監督の子供時代の愛称）が、翌年、一家を挙げて台湾の南部の田舎町・鳳山（閩南人の村）に移住して来るまでのいきさつを語るところから始める。映画は、それから後、阿孝が大人になるまでの十数年の間に阿孝の家族とその周辺に起った様々な出来事を淡々と描いている。

しかし、『童年往事』は単に侯監督の自伝的作品であるというにとどまらない。この映画は、阿孝という一人の少年の家族の歴史を語ることを通して、台湾の歴史、当時（１９５０～６０年代）の社会環境やその変化をも語り出そうとしているのである。

この映画では、阿孝を中心とした三つの世代、すなわち阿孝の祖母の世代、阿孝の父母の世代、阿孝の世代が対照的に描き出されている。また、この映画では、国語（北京語）、台語（閩南語＝台湾語）、客家語という三種類の言葉が使われているが、それらの実際の使われる方は、映画の中で非常に重要な役割を果たしている。祖母は、故郷の言葉である客家語しか話さず、黒い服装やひっつめ髪など客家の伝統的な風俗習慣を頑なに守り続けている。それで阿孝の

家族の間では、もっぱら客家語で会話をする。しかし一歩家の外に出ると、客家語を話す人はあまりいない。それは鳳山に閩南人が圧倒的多数を占めており、町の人たちはみな台語を話しているからである。当時、政府の政策によって、学校や役所などの公的な場所、あるいはテレビ・ラジオなどの公共放送においては、外省人の母語である国語の使用が義務づけられ、台語や客家語の使用は厳しく禁じられていた。だから阿孝は、学校では公共語である国語、友達との間では台語、家庭では客家語と、場面によって三つの言葉を使い分けているのである。ある小さな家族の日常生活的な言語の使い方の背後にも、このような台湾の複雑な社会状況を見てとることができる。

２）閩南の監督

呉念真は１９５２年、台湾・台北県生まれ。侯孝賢のような海外留学の経験はなく、輔仁大学の会計科を卒業し、７８年に映画の世界に入った。彼の作品は台湾の庶民の生活を描くことが多い。ここでは特に、呉監督の作品の中から、代表作の一つ『多桑』を取り上げ、新映画の、台湾の人や社会の捉え方について、更に具体的に眺めてみることにしよう。

『多桑』は呉監督の父親がモデルで、彼の頑固な父親の、日本へのあこがれをじっくりと描いた秀作である。多桑とは、戦前の日本統治下の台湾で、日本語教育が徹底されたため、人々は父親を「とうさん」と呼んだ。それを台湾語の当て字である多桑と記した。戦後、中国語教育が強制された台湾で、差別を受けながらも、まだ見ぬ「母国」日本へのあこがれを隠さなかった悲しい「台湾人」の物語である。

戦前の日本教育を受けた主人公の「父さん」は、東京オリンピックのテレビ中継を熱心に見、台湾と日本の対戦試合では日本を応援する。調子が悪くなったラジオを叩き、「安物ばっかり買って……。日本製なら 10 年はもつのに」と愚痴を言う。そのような日本びいきの「父さん」の姿は、現在台湾本省人の高齢者の姿を現すものである。

第２節　閩客双方に現れた意識の現状

（1）ヒアリング記録の抜粋

１）C.L 先生との会話（客家の学者・客家人）２００４年８月３０日午後

・ 客家人は３００万人と推定される。しかし、日常生活で客家語を用いているのは約２００万人である。客家語を話すことはアイデンティティを確認

できる最も確かな方法の一つである。客家人口についての正確な統計ない。大正９年に台湾住民貫籍統計を行ったものによれば、客家は１６％である。１９５６年の国民政府統計によれば、１５．６％である。数字については大部分が憶測にすぎない。客家の主な居住地は新竹・桃園、高雄、台中、花蓮の４地区である。嘉南平原（台南、雲林、嘉義）や彰化平原の客家は「同化されている」。生活様式や祖先崇拝のやり方などは紛れもなく客家の形なのにそのアイデンティティはない。客家であると指摘されると怒る始末である。

・ 客家の本質は血統概念ではなく、文化概念である。外省人が中国各地から来たものの、台湾では外省人としてひとまとまりにされているように、客家の形成も各地から集まった人々によって文化が形成されたものである。「血統論」は時代遅れである。

２）許極燉さんとの会話（台湾の歴史と言語の学者・閩南人）２００５年１０月９日

・ 客家人の精神はさまざまな特質をそなえている。勤勉で団結しあい、教育と宗族観念を重視し、質素で節約好き、保守的である。一方、閩南人はいつもお客に情熱をもって接待する、冒険心に富み、外来の文化の影響を受けやすい。例えば閩南人は元々生食の習慣はないが、日本統治時代の影響で、刺身を好む人も多い。許先生は台湾の旗山に育つ。旗山は閩南の村と言われる。その隣は客家の町・美濃であるから、閩客の差をよく感じている。
・ 日本統治時代に入ると「分類械闘がピシャト無くなってしまう」。それは清王朝の消極的放任政策とは違い、日本帝国は台湾を積極的に経営し、法治制度をもって統治したからである。具体的には、台湾総督府は、社会治安における低犯罪率化、「分類械闘」の紛争解消、旧来の汚職・腐敗の官吏の風紀を一新した廉潔かつ能率的な官僚システムの確立、より公正な司法裁判システムの導入、清朝の役人と違い日本の司法関係者や警察官は台湾語の知識が要求され、台湾人民に安住し得る社会を提供した。
・ 義民とは清朝の殖民式統治に手を貸した者ばかりである。義民は「朱一貴の反清朝事件」から既にあった。確かに義民の殆どが客家人であり、その比率は９０％を占めた。さらに、そのうち遊民が多くを占めている。彼らは反乱軍から郷里を守るという旗印を掲げているが、実際は政府側に立って戦っていた。そのために政府に「義民」と認められた。
・ 閩南人は歌仔戯などの芝居を見るのが好きだった。それは早期の移民時代、移民は男子の独身者が殆どで、異郷の地での生活が淋しく、望郷の思いがつのり、歌仔戯の観劇の場で同郷者に会えることを楽しみとした。また、

厳しい自然との戦いや先住民との軋轢の中、日々、開拓を続ける彼らは、たくさんの廟を建て、神を祀って天の御加護を求めた。そして天への謝意を込めて盛大なる祭祀が催され、華やかな奉納芝居が演じられたのである。当時の人々にとって歌仔戯は心を慰めてくれる精神的支柱となっていた。

・ 台湾の本省人のほとんどが漢人移民の末裔ではなく、実は漢化の越族の移民者と台湾の先住民の混血だった。それは「有唐山公、無唐山媽」のことわざに示めされている通りであり、移民の大多数は皆「羅漢脚」（男子独身者）だったので、彼らと先住民の女性との間に生れた子孫が現在の台湾人である。つまり一般にいわれる漢民族ではなく、ほぼ１００％近くが多かれ少なかれ先住民の血を引いている。この事実は、最近の医学界の HLA（Human Leukocyte Antigen）研究でも裏付けられている。

・ ある人は客家の本質は血統概念ではなく、文化概念であると提唱しているが、実は血統という遺伝的なものはそう簡単に消えるものではない。例えばアメリカの中国人の国籍はアメリカ人に違いないが、しかし、毎年伝統的な旧正月の春節を大切にしている。このような複雑な現象を単純に血統概念であるとか、或いは文化概念であるとか割り切って断言できるであろうか。実は血統概念の上に、文化概念が覆いかぶさっているのである。

３）戴寶村さんとの会話（政治大学の教授・客家人）２００４年８月３０日

・多元文化と多様化文化は台湾にとって最も大切な資産である。

・閩南人と客家人はお互いに「和而不合」であるべきである。その合というのは融合であり、お互いの文化的差異を理解して、お互いに相手方を尊重して共存共栄の現実を図れば平和になっていくと考えられる。

４）李悠峰さんとの会話（世新大学の教授・閩南人）２００４年８月２４日

・ 現在の台湾で、閩客の問題は深刻化している課題である。それは清朝から現在までも、支配者の分裂政策でお互いにその軋轢を回復できない。とくに選挙になるとお互いの障壁となる。

・ 移民時代に閩南人と客家人は文化の違い、特に言語の違いがあったのに加えて、灌漑用の水源をめぐってしばしば武力対立を引き起こした。また、当時の清朝は義民を利用して両方を分裂させた。

・ 統計資料によると、清朝時代の台湾における大規模な分類械闘は６０回あった。しかし、その械闘は、最初は博打と盗みとかが原因で大規模な武装衝突となったものである。例えば道光６年、広東出身の客家人の一人が閩南人の所有する豚を一頭盗んだことから、閩南人と客家の人々との間に以前からくすぶっていた憎悪と対立の感情が爆発し、大規模な武装衝突が発生した。閩南人と客家人との居住地の境界線では殺し合いが止むことがな

く、員林一帯の客家人は大埔心庄と関帝廟街に逃れて守備を固めた。これにより、北は大甲渓北の淡水庁下、南は虎尾渓嘉義県境までが動揺した。

５）林建隆さんとの会話（東呉大学の教授・閩南人）２００４年８月２３日

・台湾の閩客について理解したいのであれば文学作品と映画から資料を選ぶのが一番よい。客家の作者としては鐘理和と鐘鉄民の二人。彼らの作品には客家の精神、客家の女性の生命力がきわめてよく表されている。
・清朝が統治の便のために、よく閩南人と客家人の矛盾を利用することがあった。現在の台湾でも政治家はよく両者の矛盾を利用しようとする。例えば戦後、外省人が統治者として台湾に入ってきたが、外省人は人数では少数である。それが多数の閩南人を統治することになる。外省人と閩南人は敵対関係となるわけだ。そこでもともと閩南人と仲の悪かった客家人は、「敵の敵は味方」の論理で外省人と近付くことになる。

６）謝景来さんとの会話（客家の藍衫を作る師傅・９５歳・客家人）２００４年８月２８日

・ ９０代の謝さんは客家語と日本語しか話せない、筆者は客家語が話せないので謝さんとの会話は日本語だった。
・ 謝さん若い頃、閩客二大グループは共に日本軍と戦ったが、戦う前に閩南人は逃げしまった。その後、謝さんは、閩南人は不忠だという印象を持つようになってしまった。

７）林東塵さんとの会話（元記者・８１歳・閩南人）２００４年８月２０日

・ 林さんの２０代の頃、軍隊の訓練の時に水がないので近隣の客家人に水を求めたが、近隣の客家人は一滴も分けてくれなかった。その後、林さんは、客家人はケチで付き合いにくい連中だという印象を持つようになってしまった。

第３節　まとめ

現在、台湾に住んでいる漢民族は、閩南人と客家人の二つのグループに分けることができる。閩南人の言語は閩南語で、客家人の言語は客家語である。閩南語と客家語の間には、発音や語彙などの点において、お互いに意思を疎通させることが全くできないほどの違いがある。閩南人と客家人とを人口数で見て

みると前者が圧倒的多数を占めている。そのために、同じ漢族と言っても、台湾の社会経済の中核を担っていたのは閩南人で、客家人は従属的な地位に甘んじてきた。

このような序列関係は、台湾社会における言語の使用状態にも反映されている。多数派集団＝強勢集団（社会的に優位にある集団）（注４３）である閩南人の母語（閩南語）は、少数派集団＝弱勢集団（注４４）である客家人の母語（客家語）を押しのけ、やがて台湾漢民族の共通語のようになり、「台湾語」と呼ばれるようになった。言語の上でも、客家人は従属的な立場に置かれたのである。

従来、閩南人の間では台湾語が、客家人の間では客家語というように、同一民族集団の間ではそれぞれの母語を使って会話が行われていた。そして、閩南人と客家人が接触する場面では、客家人が多数派集団である閩南人に合わせ、閩南語によってコミュニケーションがとられることが多かった。客家人は閩南人との人間関係を保つために、とくに閩南人と商売する時には必ず閩南語で会話している。それに反して客家語を話せる閩南人は少ない。それは侯孝賢監督の『童年往事』という映画にも描かれている。例えば映画の主人公は、家では客家語で、家を出ると閩南語で、そして学校では国語である。台湾の映画は、台湾に生きる庶民の日常生活、台湾の現実を率直に見つめ、写実することにこだわり続けてきた。そして、その結果生み出された一連の作品群は、文字通り台湾社会の記録、台湾人の歴史の記録と言えるものであった。台湾映画の登場によって初めて、台湾映画が台湾の現実の姿を写し出す鏡としての役割を持つようになったのである。そして、観客はこれらの作品を通じて、改めて台湾とは何か、閩客の関係とはいかなるものか、台湾人であるとはどういうことなのかを深く考えさせられることになった。

映画だけではなく、台湾の文学作品も現実に生きる閩客の姿を誠実に描いている。

閩客の文学作品を通じてその文学作品の背景にある閩客の文化を理解することができる。例えば鐘理和の作品『貧しい夫婦』の主人公である「平妹」は、客家の女性の強さと優しさを完全にあらわしている。

また、ここで注意しておきたいのは、８０年代以降の発展著しい台湾で語られてきた「台湾人」という言葉の含意についてである。ここで言うところの「台湾人」とは、実は台湾に住む人間すべてを指すものではなく、閩南語を話す民族集団である閩南人を主体とするというニュアンスが強い。閩南人と同じ漢民族でありながら人口上では少数派集団となっている客家人の存在は、実際には半ば脇に置き忘れられたような形になっていた。

その意味で、客家の文学作品を通じて「客家も台湾人の一員である」というメッセージが、そこには込められているように思えるのだ。

私は閩南人と客家人という二つグループに対する理解を一層深めていきた

いと考え、ヒアリング記録をした。その中に登場する人物は、現在、台湾で影響力がある教授で、閩客の高齢者である。

２００４年８月、９０代の謝景来さん（客家の藍衫を作る師傅である）にインタビューした。彼の母語は客家語であり、さらに日本時代に共通語として教えられた日本語を使うことができるが、北京語は話せない。私は客家語が話せないので、謝さんとの会話は日本語で行なった。私と謝さんは同じ台湾人、同じ台湾の地に生活しながらなぜ言語が通じないというところは私が一番関心を寄せているであった。

最初に謝さんと会った時、言語が通じないので非常に距離感があった。しかし私が日本語でインタビューすると謝さんとの親近感やお互いの距離の近さが感じられた。

以上、このヒアリング記録ができあがるまでには、多くの方々にお世話になった。特に明治大学の許極燉教授、政治大学の戴寶村教授、世新大学の李悠峯教授と東呉大学の林建隆教授にたいしては、心からの感謝を棒げたい。

終章　結論と今後の課題

第１節 結論

（1）多様性の台湾民族とその歴史

１６世紀中頃、台湾本島の近くを通りかかったポルトガル船が、その美しい島影を見て、感動のあまりこう叫んだと言うーilha Formosa!（麗しの島！）。以来、台湾は欧米諸国ではフォルモサと呼ばれるようになり、台湾でも、「美麗島」という別称がしばしば使われるようになった。台湾に暮らす人々の故郷に対する深い愛情と誇りが、この美麗島という言葉に表れている。

漢民族が大挙して移住して来る以前の台湾は、マレー・ポリネシア系の先住民の住む島であった。マレー・ポリネシア系に属すると言われる先住民は、アタイヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、アミ、ピユマ、ルカイ、パイワン、ヤミ、の９つの　部族（注４５）（図１６）からなり、それぞれ固有の言語や社会組織・生活文化を有しており、多様性に富んでいる（注４６）。

先住民の分布

（図１６）

住居の例を挙げると（注４７）、タイヤル族は丸太や竹を組み合わせて家を建てるが、パイワン族は壁から屋根まで薄い石坂だけを使って家を造る。また、ヤミ族の伝統的住居は、半地下式の独特のものである。社会組織にしても、ブヌン族、ツォウ族などは財産などの継承が父方の血筋を通じて行われる典型的な父系社会であるのに対し、アミ族はそれらの継承が母方を通して行われる母系社会となっている。もう一つ例を挙げると（注４８）伝統的な物質文化と精神生活の面においても多様である。ヤミ族の筏（いかだ）舟と飛魚漁撈による生活様式は有名である（注４９）。パイワン族とルカイ族の木彫りと貴族制度は、民族学者が最も興味を覚えるテーマである。ピユマは先住民の中で最も盛んに巫術と祭祀をおこなう部族である。アミ族の歌舞と製陶は、ほかのどの部族よりも優れている。アタイヤルの織物は観光客が競って買い求める記念品でもある。サイセットの年に一度の小人祭には部族の数十倍にあたる観光客が集まる。台湾で有名な歌「高山青」の主人公はツォウ族である。ブヌン族の狩猟と粟の栽培は、台湾の先住民の典型的な生活様式である。このように先住民が文化の上で表す多様性は、人類の文化的バリエーションの全領域を網羅しているともいえる。

１７世紀初頭から清朝末期即ち１９世紀末に至る年まで、台湾はいわば移住民の「新天地」だった。群をなして台湾に移住してきた移住民を本省人と言う。その本省人は閩南人と客家人という２大グループからなっていた。しかし、台湾のこの新天地の土地占有を中心とした地盤争奪をめぐる「台湾・西部劇」の世界は、先住民と移住民間にあっただけではない。移住民集団間にも起った。初めは閩南系の泉州人と漳州人間で、後には閩南人対客家人、利害いかんによっては泉・客の連合対漳あるいは漳・客の連合対泉の形態をとる分類械闘という名の流血劇が頻発した。開拓の進展に伴って泉・漳を中心に閩南人としての融合が進展した。だが閩南人と客家人間の融合・統合は言語・気質・信仰などの相違と地盤をめぐる利害などがからまって容易ではなかった。

また、外省人とは第二次世界大戦後、新たに中国大陸から台湾に渡ってきた人々及びその子孫のことを指す。外省人は、その大部分が漢族と考えて差し支えないが、なかにはごく少数の蒙古族、回族、満州族などもいた。台湾の歴史の中で本省人と外省人の関係も決して平坦なものではなく、排斥や迫害、争いを含んでいた。国民党政府の台湾移転とそれに随伴して大量に移住してきた外省人は、国民党の腐敗官吏に占められ、祖国に復帰し今度こそ活躍の場を得られると思っていた能力ある台湾人はほとんど採用されなかった。接収された日本企業は台湾人実業家の手には渡らず、ことごとく国営または公営（台湾省営）となり、国民党政府は膨大な財産を手中に収めた。このような外省人の独善的なふるまいに、日本人が去り、ようやく台湾の主人になれると思っていた台湾人は、失望を通り越して怒りすら覚えていた。

追い打ちをかけるように、巷では深刻なインフレが起り、物価が上昇、民衆の生活は困窮を極めた。経済状況の悪化に伴い失業者も急増したが、国民党政府は意図的に台湾人を排除したため台湾人の就労機会は極端に減少、３０万人（注５０）以上の失業者が町に溢れることになった。外省人の役人・警察官・兵士の一部は、治安を維持するどころか勝手な不法行為を働き、社会秩序は一気に悪化した。国民党を形成していた外省人の台湾人に対する露骨な蔑視も、日常的に横行していた。

このような社会状況のもと、「２２８事件」が勃発した。国民党による台湾人に対する無差別の殺戮が展開され、台湾人の抵抗は完全に鎮圧された。殺戮には機関銃が使われた他、生きたままの人間を麻袋に詰めて川や海に投げ捨てるなど、その方法は残虐きわまりないものであった。事件の終息後、恐るべき大粛清が始まった。事件関係者をはじめ、政府に批判的な意見を持っているとされた政治家やインテリは次々に逮捕され、惨殺された。事件に関係したとして殺害された台湾人は、２８０００人にのぼると言われている。（注５１）「２２８事件」は、以後、台湾の歴史に深い傷を残すことになった。また、この事件に関する台湾で最も有名な映画は「悲情城市」である。監督は侯孝賢。彼は新しい境地を開いたこの歴史的な大掛かりなドラマの中でも、持ち前の淡々とした語り口を崩さず、台湾の人々の心情をじっくりと表現している。作品全体を覆っているのは、日本人から中国人になり祖国復帰を喜んだ途端に、国民政府から弾圧され沈黙を強いられる台湾人の悲しみである。また、もう一人監督や脚本を書いた呉念真が、これは政治映画ではなく台湾人を描いた映画だといくら強調しても、人々の関心は長いことタブーとなっていた２２８事件に集まっている。

台湾はこれまで、漢民族対先住民、閩南人対客家人、本省人対外省人、閩南人対外省人と客家人といった対立構造を常に社会の裏側に抱え込みながら成長を遂げてきた。そこには、外からやって来た強い立場の民族集団が弱い立場の民族集団を抑えてイニシアチブを握るという、階層的・差別的な構造が顕著に見られた。しかし、８０年代以降の民主化の流れの中で、こうした構造も徐々に変化を見せつつある。漢民族も先住民も、閩南人も客家人も、本省人も外省人も、それぞれ対等の立場で自分たちのメッセージを発信し、社会に参加することができるようになってきた。

２１世紀の現在、少しずつではあるがそれぞれの民族集団がお互いに歩み寄り、相互に微調整を繰り返しながら新しい一つの台湾社会を作り上げていこうとする機運は整いつつある。ここにいくつ例を出したいと思う。客家の民族文化が大衆文化に押しつぶされそうになり、民族の文化が消滅する危機が迫っている。民族文化絶滅の危機から逃れるため、客家の識者たちが中央機関に専門機構を設立することを強くようとした。その目的は要求し、客家の精鋭と政府の力で客家の文化を継承し、客家伝統の文化を振興し客家に新しい機会を開く

使命を担うことによって、４百万以上の台湾客家人に奮闘を促がし、台湾を多元的な民族文化を持つ現代社会にするため推進することである。やっと２００１年に陳水扁大統領の推進で「客家委員会」が設立された。客家委員会成立の目的は客家言語の復興、客家言語の活性化、客家文化の研究、客家文化の称揚、客家政策研究検討会、民族的グループ間の共通認識の確立と文化の拡大、「客家文化園区」の設立と文化の充実、客家文化産業の計画、資源の共有、内外客家事務の交流、民族間の調和などを推進することである。その後、２００５年３月に「先住民委員会」も設立された。

現在、台湾人はよく客家人の村、先住民の村などへ観光に行く。例えば美濃。そこは台湾で客家が多く住んでいる地として有名である。美濃の伝統工芸品は油紙傘である。客家によってこの油紙傘は、雨避けとしての本来の用途とは別に、男性が１６歳で成人する時、また女性が他家に嫁ぐ時に持たせて、子孫繁栄を祈念する吉祥の品になっている。

観光によって、各族の生活、飲食、文化等、台湾のお互いを理解するようになってきた。私もまた小さいころから客家人のことを全然知らず、２００４年８月に美濃に旅した後、客家文化を深く理解するようになってきた。

また、宗教活動においても閩客は良い交流をするようになってきた。例えば媽祖の遶境活動（注５２）。お互いにこのイベントに尽力することが責務でもあり、光栄でもあると考えられるようになってきている。遶境の路線にあたる地域の人々は自分の家からお供えを持ち出し、あるいは通過する信者のために食べ物や飲み物を用意しておく。とにかく、このイベントのために皆黙々として自分にできることを最大限に実行していく。

このように、本省人ばかりではなく、外省人や先住民も同じ台湾に住み運命をともにする台湾人なのである。台湾に住むすべての人間を台湾人と呼べるような、新たなる台湾人のアイデンティティを求めて、台湾社会はさらに前進しようとしている。そして、お互いに相手方を尊重して民族の融和を進め、二度と争うことなく、喜びと悲しみをともにしながら、一緒にこの島台湾で生活しようとしている。

第２節　今後の課題

現在の台湾社会には二つ深刻な課題がある。まず第一は、台湾社会はさまざまな言語. 文化を持った複数の民族集団がともに暮らす「多民族社会」である。台湾は四つの大民族によって構成されている。四つの大民族的なグループとは人口の順に、閩南人（７４．５％）、客家（ハッカ）人（１３．２％）、外省人（９．９％）、九族先住民（２．４％）（注５３）である。その中で、１７世紀以後、１９４５年まで台湾に移住してきた漢民族を、本省人と言う。その本省人は、閩

南人と客家人という２大グループで構成されていた。この３００年間、閩南人と客家人によって、台湾の歴史の大きな部分が作られてきたといっても過言ではない。

その歴史は清朝時代、日本統治時代、国民党統治時代、と現在の民主時代の４期に分けられる。３００年の台湾史とは、台湾開拓の歴史である。それは同時に闘争の歴史でもあった。

台湾に遅く入ってきた客家人は、閩南系がすでに良い土地を占めていたため、条件の悪い土地に住みつくしかなかった。丘陵地帯に住む客家人は、付近の山間部に住む先住民を恐れなければならなかった。客家人の生活は苦しいものだった。

もともと両者の関係は良くなかったのに加えて、灌漑用の水源をめぐってしばしば閩南人と武力対立を引き起こした。これを「械闘」という。また、水源を確保するため、当時の清朝の手先となり、閩南人の反乱者の掃討を手助けした。その戦死者は義民廟にまつられている。

こうした客家人と閩南人の争いは「閩客之争」と呼ばれている。また、客家人というのは、「勤勉、節約、団結」で知られている。そして客家文化にこの上ないプライドを持っている。しかしそれゆえに、閩南語を話す本省人にとってはケチで付き合いにくい連中だという印象を持たれることが多かった。

しかし客家人は、あくまでも台湾ではマイノリティーである。ところがそこに、戦後、外省人が統治者として台湾に入ってきた。外省人も人数では少数である。それが多数の閩南人を統治することになる。外省人と閩南人は敵対関係となる。そのためもともと閩南人と仲の悪かった客家人は、「敵の敵は味方」の論理で外省人と近付くことになる。

その後、台湾に住む全国民（閩南人、客家人、先住民、外省人）が皆和気藹々とお互い一致協力して、エスニシティーの融合をはかり、互いを尊重し、ひたすら誠実に対応しあって、争いを避ける態度をとってきた。しかし、外来文化を尊重し、相手に胸襟を開く態度こそ、現在の台湾の社会に最も欠けている点であるとの指摘もある。

この問題を解決するためには、お互いがお互いをよく理解する必要があり、台湾住民全体の知恵、理性、寛容、および忍耐力が不可欠であろう。

また、戴寶村教授の指摘のごとく、台湾にとって最も大切な資産である文化の多元性、多様化を、閩客双方は、大事にしなければならない。また、閩南人と客家人はお互いに「和而不合」であるべきである。合（融合、同化）するのではなく、互いの文化的差異を理解して、お互いに相手方を尊重しあって、共存共栄の現実を図れば平和になっていくと考えられる。

二つ目の深刻な課題は、戦後の台湾社会が、国語を軸として動いてきたということである。制度化された国語教育は軌道に乗り、若い世代にはすっかり国語が常用語として定着した。国語の普及は、各民族集団間のコミュニケーショ

ンをスムーズに果す役割を演じた。

しかし、国語の普及のお陰で「方言」という名のもとに台湾人のすべての母語が不当に抑圧・排斥されてきたという事実を忘れてはならない。国語も、閩南語も、客家語も、先住民語も、本来、それぞれ独立した言葉として等価値であり、同列に置かれるべきものである。国語を公用語とすることがよいか悪いかという議論はさておき、その他の母語の存在を全く無視してきた政策には明らかに問題がある。その結果は現在の台湾の若者は母語として使うのは家庭や祖父母と同じ世代の老人と話す場合や、ごく親しい友人と話す時くらいのものとなった。彼らは家庭では国語と母語を混在させて使っているが、学校での国語教育の影響は大きく、学校や町での買い物、また友達付き合いなど日常生活では国語を常用している。実際、町で耳にする若者同士の会話はほぼ１００％、国語によるものである。公共の場所では国語を使うのがマナーとされており、母語を使えば相手に対して失礼であるとも考えられている。国語政策の中で育った若者の中には、母語は低俗でカッコ悪い言葉と考えている若者もいる。

町で買い物をする時こんな会話を耳にしたことがある。祖母の言うことを聞かない孫を、母親が「どうしておばあちゃんの言うことが聞けないの！」と叱ったところ、子供は「だって、おばあちゃんの話す言葉（すなわち閩南語）、分かんないんだもん」と答えたのである。閩南語しか話せない祖母と国語しか話せない孫。二つの世代間で全くコミュニケーションがとれないという恐ろしい事態が生じているのが、今の台湾社会である。

少数派集団である客家の場合、閩南人に比べ事情はさらに深刻である。

母語人口が少なく、社会的にも弱勢言語である客家語は、常に国語や閩南語への同化の脅威にさらされてきた。台北市在住の客家の大学生を対象とした調査によれば、彼らの中で客家語を解する者は７０％強（注５４）しかいなかった。若者たちが次第に母語を話せなくなってきていることが分かる。

客家人の家庭でも、祖父母や父母の世代では母語を使っていても、父母と子供の間、あるいは子供同士の間では国語や閩南語といった強勢言語を常用語としているケースが多い。強勢言語には、社会・経済的地位が高い、母語人口が多い、学校・行政機関・メディアなどの制度的な支持を受けているなどさまざまなメリットがある。実はこのことが、弱勢言語が消えていく大きな原因となっている。弱勢言語を母語とする者の集団は常に解体され、強制言語に飲み込まれてしまう危険性を孕んでいる。

実は、客家の若者は家庭のなかでさえ客家語より国語や閩南語を常用語とするケースが増えている。学校では徹底した国語教育を受け、家に帰ってテレビをつければ耳に入ってくるのは国語。このような社会環境の中、客家語を話せない若い客家も増えてきており、今や母語の消滅さえ懸念されている。母語を失うということは、自らがよって立つところの民族的アイデンティティを失うということには他ならない。客家語を母語と認識しなくなれば、同時に客家と

してのアイデンティティも消失していく。客家語の衰退が台湾客家の衰亡に繋がることを恐れる声もある。

最近の台湾ではようやく、言語の復権、民族意識に目覚めたそれぞれの民族集団が社会的権利を主張するようになってきた。このような流れの中、閩南、客家、先住民は各々「還我母語（私の母語を返して）」（注５５）運動を展開、母語の見直しも進んでいる。

数百年の歴史を経て、台湾では今ようやく、さまざまな言語について客観的に対等な立場で議論ができるようになってきた。今後特に重要になってくるのは、言語のバランス感覚、特に国語と母語の間のバランス感覚であろう。イデオロギー色を抜きにして、時と場合に応じて国語と母語を自然にスイッチして使うことができるような、そんな社会的条件を整えることがこれからの大きな課題となってこよう。

この問題を解決するために、言語の平等、各民族語によるテレビ・ラジオ放送、さまざまなメディアを有効に活用しながら、体系的な母語教育を行う体制を行政のサポートのもとに整えること、若者や子供たちが言語を含め民族集団の固有文化を再認識することができる機会を増やすこと等といった試みが、ますます必要になってくるものと思われる。

付録１：清代の分類械鬪一覧表（注５６）

案次	年代	發生地點	蔓延地點	發生類型	案件名稱	發生地區	規模大小
1	1721	鳳山		閩客械鬪	朱一貴案	南	大
2	1723	鳳山		閩客械鬪	賴君奏案	南	小
3	1732	鳳山		閩客械鬪	吳福生案	南	大
4	1734	諸羅		蔡魏両姓	蔡馬益案	中	小
5	1750	諸羅			李光顯案	中	小
6	1768	鳳山		閩客械鬪	黃 教案	南	大
7	1777	淡水		閩客械鬪		北	小
8	1782	彰化		彰泉械鬪	謝 笑案	中	大
9	1783	淡水		閩客械鬪	張 昂案	北	小
10	1783	諸羅		楊姓兄弟	楊光勳案	中	小
11	1786	諸羅		黃張兩姓	黃 霞案	中	小
12	1786	彰化		閩客械鬪	林爽文案	中	大
13	1788	彰化		彰泉械鬪	陳 顯案	中	小
14	1789	淡水		陳郭兩姓械鬪	陳 武案	北	小
15	1789	淡水		紀姓械鬪	紀 四案	北	小
16	1789	嘉義		李陳兩姓械鬪	李 同案	中	小
17	1790	彰化		彰客と泉械鬪	張 標案	中	小
18	1791	嘉義			沈 川案	中	小
19	1797	哈仔雞		泉客械鬪			小
20	1806	哈仔雞		泉客番と彰械鬪			小
21	1806	彰化		彰泉械鬪		中	大
22	1809	淡水		彰泉客械鬪	黃 紅案	北	大
23	1809	哈仔雞		泉客番と彰械鬪			小
24	1816	臺灣縣		同姓職業械鬪	蔡 攤案	南	小
25	1826	嘉義		泉客械鬪	李 通案	中	大
26	1826	噶瑪蘭		閩客械鬪	吳集光案		小
27	1830	噶瑪蘭		挑夫械鬪	林 瓶案		小
28	1832	嘉義		閩客械鬪	張 丙案	中	大
29	1833			閩客械鬪		北	
30	1841	鳳山		閩客械鬪	陳 沖案	南	小
31	1844	彰化		彰泉械鬪	陳 結案	中	大
32	1847	鳳山		閩客械鬪		南	
33	1847	淡水		彰泉械鬪		北	
34	1850	嘉義			王 湧案	中	小
35	1850	彰化		彰泉械鬪		中	小

36	1852	臺灣縣		轎夫械鬪		南	小
37	1853	鳳山		閩客械鬪	林 恭案	南	大
38	1853	淡水		彰泉械鬪	林本源案	北	小
39	1853	淡水		彰泉械鬪		北	大
40	1853	彰化		彰泉械鬪		中	小
41	1854	淡水		閩客械鬪		北	大
42	1855	淡水		彰泉械鬪		北	
43	1859	淡水		彰泉械鬪		北	大
44	1861	淡水		彰泉械鬪	林國芳案	北	小
45	1862	彰化		彰と泉客械鬪	戴萬生案	中	大
46	1862	淡水		蘇黃械鬪		北	小
47	1865	噶瑪蘭		三姓械鬪			小
48	186?	彰化		三姓械鬪		中	小
49	186?	淡水		林鄭械鬪	鄭如棟案	北	小
50	186?	鳳山		閩客械鬪		南	
51	186?	噶瑪蘭		西皮福祿			小
52	1875	鳳山		閩客械鬪		南	
53	1876	淡水			吳阿來案	北	小
54	1881	鳳山		林姓械鬪	林克賢案	南	小
55	1882	淡水		閩客械鬪	林汝梅案	北	小
56	1882			陳吳械鬪		南	小
57	1886	噶瑪蘭		西皮福祿			小
58	1887	噶瑪蘭		西皮福祿			
59	1888	嘉義				中	
60	1894	臺南縣		黃姓		南	

付録２：分類械鬪発生地一覧表　（注５７）

区域	南　部				中　部				北　部				噶　瑪蘭				總計
時間	閩客	漳泉	姓氏	其他	閩客	漳泉	姓氏	其他	閩客	漳泉	姓氏	其他	閩客	漳泉	姓氏	其他	
康熙	1																1
雍正	2						1										3
乾隆	1		1			4	3	2	2		2						13
嘉慶						1				1			2	1			5
道光	2				2	1		1	1	1			1		1		10
咸豐	1		1	1		3			1	5							11
同治	1						1				2				1	1	6
光緒	1		3					1	1			1				2	9
合計	9		4	1	2	9	5	4	5	7	4	1	3	1	2	3	60
總計	14				20				17				9				60

付録３：分類械鬪統計表（１０年単位）（注５８）

付録４：台湾の人口推移（注５９）

注

注１　中国沿海地方の住民を奥地へ隔離し、沿岸一帯を無人地帯にさせる法令。清初の遷界令は鄭氏一統の孤立化を狙い、商民船隻の出海通商を１６５６年以降厳禁した。

注２　伊能嘉矩「台湾に於ける移植漢民の原籍及拓地の年代」（同著『台湾文化志』下巻、東京、刀江書院、１９６５年、複刻版）３８２～３９０ページ。

注３「黒水溝」というのは深い海溝の意味。台湾海峡の異名である。

注４　若林正丈・劉進慶・松永正義『台湾百科』大修館書店、１９９０年、１７６ページ。

注５　女性は才能がなければないほど徳とされ。

注６　「大脚」というのは自然の足。

注７　林　浩　『アジアの世紀の鍵を握る一客家の原像―その源流・文化・人物』中公新書、１９９６年、１８８ページ。

注８　同上、１９３ページ。

注９　同上、１０３ページ。

注１０　同上、１０９ページ。

注１１　同上、１０９ページ。

注１２　同上、４８～５０ページ。

注１３　高橋普一『美麗島の人と暮らし再発見』三修社、１９９７年、１７ページ。

注１４　仁井田陞「支那近世同族部落の械闘」（東洋農業経済史研究所収）６６ページ。

注１５　北村敬直　「清代械闘の一考察」教育タイムス社出版部、６４～６６ページ。

注１６　王育徳『台湾―苦悶の歴史』弘文堂、１９６４年、７３ページ。

注１７　同上、７３ページ。

注１８　同上、７４ページ。

注１９　同上、５８～５９ページ。

注２０　喜安幸夫『台湾史再発見』秀麗社、１９９２年、１４９ページ。

注２１　地方官の暴政に端を発した民衆蜂起。一時は府都を制圧し、指導者の朱一貴は王を称した。２６ページ参照。

注２２　天地会の指導者だった林爽文が彰化、嘉義一帯で起こした反乱事件。反乱勢力は１７８８年までこの地方を支配した。３２ページ参照。

注２３　八卦会の指導者だった戴潮春が斗六、嘉義一帯で起こした反乱事件。

注２４　喜安幸夫『台湾の歴史―古代から李登輝体制まで』原書房　４１ページ。

注２５　同上、４１ページ。
注２６　殷允芃『台湾の歴史』藤原書店、１９９６年、１１２ページ。
注２７　喜安幸夫前掲書、１７０～１７３ページ。
注２８　唐聖美『清代閩粤與台灣地区械鬥之比較』東海大学歴史研究所碩士論文、２００３年、７６ページ。
注２９　林再復『閩南人』三民書局、１９８４年、２４１ページ。
注３０　殷允芃前掲書、１０５ページ。
注３１　殷允芃前掲書、１０５ページ。
注３２　原意は、あらゆる善はともに天国に帰る。
注３３　孤独な霊魂との交感。
注３４　沈建徳『台灣常識』東益出版社、１９９８年、４６ページ。
注３５　喜安幸夫前掲書、１７１～１７３ページ。
注３６　史明『台湾人四百年史』新泉社、１９７４年、２１７～２２２ページ。
注３７　王育徳『台湾―苦悶の歴史』弘文堂、１９６４年、５９ページ。
注３８　唐聖美『清代閩粤與台灣地区械鬥之比較』東海大学歴史研究所碩士論文、２００３年、１１２～１１７ページ。
注３９　同上、１１２～１１７ページ。
注４０　王育徳前掲書、５９ページ。
注４１　山本三生『日本地理大系第１１巻台湾篇』改造社、１９３０年、３２０ページ。
注４２　渡辺亜子『採取メモー長衫』文質文化研究会、１９８０年
注４３　高橋普一『美麗島の人と暮らし再発見』三修社、１９９７年、３５ページ。
注４４　高橋普一前掲書、３５ページ。
注４５　戴國煇『もっとしりたい台湾』弘文堂、１９８６年、３２ページ。
注４６　Chen Chi Li, Material Culture of the Formosan Aborigines, Taipei. Taiwan Museum
注４７　高橋普一前掲書、１１～１６ページ。
注４８　戴國煇前掲書、　３６ページ。
注４９　Kano Tadao and Segawa Kokichi, An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol.1 The Yami. Tokyo, Maruzen 1956.
注５０　高橋普一前掲書、　２１ページ。
注５１　同上、２２ページ。
注５２　同上、７ページ。
注５３　酒井亨『台湾入門』、日中出版社、２００１年、２０ページ。
注５４　高橋普一前掲書、　４７ページ。
注５５　林浩　『アジアの世紀の鍵を握る一客家の原像―その源流・文化・人物』中公新書、１９９６年、１１４ページ。

注５６　付録１　林偉盛『清代臺灣分類械鬪之研究』國立政治大學歴史研究所碩士學位論文、１９８８年、１０５～１０８ページ。
注５７　付録２　林偉盛前掲書、　１０８ページ。
注５８　付録３　林偉盛前掲書、１０９ページ。
注５９　付録４　殷允芃『台湾の歴史』藤原書店、１９９６年、９３ページ。
図１　撮影日　２００５年１２月。
図２　笠原政治・植野弘子　『暮らしがわかるアジア読本―台湾』河出書房新社、１９９５年、１５ページ。
図３　撮影日　２００５年１２月。
図４　若林正丈・劉　進慶・松永正義　『台湾百科』、大修館書店、１９９０年　１９７ページ。
図５　同上　１９９ページ。
図６　同上　２００ページ。
図７　同上　２００ページ。
図８　撮影日　２００４年１２月。
図９　撮影日　２００５年１２月。
図１０　撮影日　２００４年８月。
図１１　撮影日　２００４年８月。
図１２　笠原政治・植野弘子前掲書、３７ページ。
図１３　撮影日　２００５年１２月。
図１４　撮影日　２００５年１２月。
図１５　戴國煇　『もっとしりたい台湾』弘文堂、１９８６年　２０ページ。
図１６　戴國煇前掲書、３３ページ。

参考文献:Bibliography

日本語文献

伊能嘉矩　『台湾文化志』　刀江書院、昭和３年（１９２８）
武内貞義　『台湾』　南天書局、１９２８年
山根勇蔵　『台湾民族性百談』　杉田書店、昭和５年（１９３０）
平山勲　臺灣社会経済史全集、第二冊、第二章に臺灣社会史に於ける分類械鬪—論争に已むなく参加せしめられてー　５７～６８ページ　臺灣経済史学會出版、１９３５年
宋明哲　『臺灣社会経済史に於ける分類械鬪の意義に就いて』　唯物論研究２８号、昭和１０年（１９３５）
井出季和太　『台湾治績志』　台湾日日新報社、１９３７年
東嘉生　『臺灣に於ける分類械鬪—臺灣社会經濟史研究—』　臺灣時報　第２０８号、昭和１３年（１９３８）
中村　哲　『分類械鬪と復仇』　臺灣民俗、４巻４期、昭和１９年（１９４４）
同上　『分類械鬪—臺灣を中心として』金關博士古稀記念委員會編　日本民族と南方文化、東京　平凡社、昭和４３年（１９６８）
仁井田陞　「支那近世同族部落の械鬪」　東洋農業経済史研究所収、昭和２３年　（１９４８）
北村敬直　「清代械鬪の一考察」　教育タイムス社出版部、昭和２５年（１９５０）
国分直一　『台湾の民俗』　岩崎美術社、１９８６年
篠原正巳　『台中—日本時代５０年』　サンプリンティング、１９８０年
石田浩　『台湾漢人村落の社会経済構造』　関西大学出版部、１９８５年
同上　『アジアンの中の台湾』　関西大学出版部、１９９９年
司馬遼太郎　『中国・閩のみち』　朝日新聞社、１９８９年
同上　『台湾紀行』　朝日新聞社、１９９７年
岸本葉子　『微熱の島台湾』　凱風社、１９８９年
末成道男　『民族文化の世界—儀礼と伝承の民族誌』第３章　伯公考—台湾客家系農村の事例よりー　小学館、１９９０年
鈴木　明　『台湾に革命が起きる日』　リクルート出版、１９９０年
渡辺欣雄　『漢民族の宗教—社会人類学的研究』　第一書房、１９９１年
同上　『風水—気の景観地理学』　人文書院、１９９４年
山口修　『台湾の歴史散歩』　山川出版社、１９９１年
喜安幸夫　『台湾史再発見』　秀麗社、１９９２年
同上　『台湾の歴史—古代から李登輝体制まで』　原書房、１９９７年
伊藤　潔　『台湾』　中公新書、１９９３年

李　筱峰　『台湾クロスロード』　日中出版社、１９９３年
吉田荘人　『人物で見る台湾百年史』　東方書店、１９９３年
柴田書店編集部（編）『食在台湾―食は台湾にあり』　柴田書店、１９９３年
植木孝　『地球の歩き方―台湾』　ダイヤモンド･ピッグ社、１９９４年
高橋普一　『美麗島の人と暮らし再発見』　三修社、１９９７年
植野弘子　『台湾漢民族の姻戚』　風響社、２０００年
酒井亨　『台湾入門』　日中出版社、２００１年
若林正丈　『台湾―変容し躊躇するアイデンティティ』　筑摩書房、２００１年
小林克己 / 中原直子　/ 石野真理　『台湾』　昭文社、２００２年
林田芳雄　『鄭氏台湾史―鄭成功三代の興亡実紀』　汲古書院、２００３年
王育徳　『台湾―苦悶の歴史』　弘文堂、昭和３９年（１９６４）
同上　『新しい台湾―独立への歴史と未来図』　弘文堂、１９９０年
史明　『台湾人四百年史』　新泉社、１９７４年
同上　『台湾は中国の一部にあらず―台湾社会発展四百年史』　現代計画室、１９９１年
戴國煇　『台湾と台湾人』　研文出版（山本書店出版部）、１９７９年
同上　『もっとしりたい台湾』　弘文堂、１９８６年
同上　『台湾―人間・歴史・心性』　岩波書店、１９８８年
同上　『台湾、いずこへ行く？！』　研文出版、１９９０年
若林正丈・劉　進慶・松永正義　『台湾百科』　大修館書店、１９９０年
笠原政治・植野弘子　『暮らしがわかるアジア読本―台湾』、河出書房新社　１９９５年
殷允芃　『台湾の歴史』　藤原書店、１９９６年
林　浩　『アジアの世紀の鍵を握る―客家の原像―その源流・文化・人物』　中公新書、１９９６年
陳建仁　『台湾自由民主化史論』　御茶の水書房、２００４年

台湾文献

連　横　『臺灣通史』　幼獅文化出版社、１９１８年
羅　香林　『粤東之風』　東方文化出版社、１９７４年
同上　『客家研究導論』　古亭書屋出版社、１９８１年
戴　炎輝　『清代臺灣之鄉治』　聯經出版、１９７９年
楊　兆禎　『台灣客家系民歌』　百科文化、１９８２年
鄧　迅之　『客家源流研究』　台中天明出版社、１９８２年
林　再復　『閩南人』　三民書局、１９８４年
戴 寶村 『清季淡水開港之研究』　台灣師大歴史研究所専刊、１９８４年
阮　昌鋭　『民俗與民藝』　台灣省立博物館、１９８４年
劉　還月　『臺灣民俗誌』　洛城出版社、１９８６年
同上　『台灣的客家族群與信仰』　常民文化、１９９９年
同上　『台灣的客家人』　常民文化、２０００年
伊　章義　『台灣近代史論』　自立晩報（台北）、１９８６年
同上　『台灣開發史研究』　聯經出版、１９８９年
陳　運棟　『客家人』　臺北聯亞出版社、１９８８年
同上　『臺灣的客家人』　協和關系機構―臺原出版、１９８９年
同上　『臺灣的客家禮俗』　臺原出版、１９９０年
蔡　相煇　『台灣的王爺與媽祖』　台原出版社、１９８９年
黄　榮洛　『渡台悲歌』　臺原出版社、１９８９年
同上　『台灣客家傳統山歌詞』　新竹縣立文化中心、１９９７年
同上　『台灣客家民俗文集』　新竹縣文化局、２０００年
李　筱峰　『２２８消失的台灣菁英』　自立晩報出版部、１９９０年
同上　『台灣史』　華立圖書、１９９３年
呉　騰達 『民俗遊藝』　行政院文建會、１９９０年
張　徳水　『激動！台湾的歴史』　前衛出版社、１９９２年
陳　浩洋　『台灣四百年庶民史』　自立晩報文化出版部、１９９２年
黄　重添等　『台灣新文學概觀』　稲禾出版社、１９９２年
台灣客家公共事務協會　『台灣客家人新論』　台原出版社、１９９３年
同上　『新個客家人』　台原出版社、１９９８年
丁　光玲　『清代臺灣義民研究』　文史哲出版社、１９９４年
莊　英章 『家族與婚姻―台灣兩個閩客村落之研究』 中央研究院民族研究所、
１９９４年
江　運貴　『客家與台灣』常民文化、１９９６年
許　極燉　『台灣近代發展史』　前衛出版社、１９９６年
董　芳苑　『探討台灣民間信仰』　常民文化事業、１９９６年
沈　建徳　『台灣常識』　東益出版社、１９９８年

王　東　『客家學導論』　南天書局、１９９８年
李　寶鑫　『台灣客家山歌』　龍閣文化傳播、１９９８年
同上　『客家創作流行歌曲３』　龍閣文化傳播、１９９８年
王　詩琅　『台灣歷史故事』　玉山社、１９９９年
陳　水扁　『客家政策白皮書』　陳　水扁總統大選競選辨公室、２０００年
邱　彦貴・呉　中杰　『台灣客家地圖』　貓頭鷹出版社、２００１年
曾　逸昌　『蛻變中的客家人』　國立圖書館出版品、２００３年
郭　弘斌　『満清據台２１３』　建中書報社、２００４年
劉　妮玲　『清代臺灣民變研究』　師大歴史研究所碩士學位論文、１９７１年
林　偉盛　『清代臺灣分類械鬪之研究』　國立政治大學歴史研究所碩士學位論文、１９８８年
方　美琪　『美濃山歌調査研究』　師大音楽系碩士論文、１９９３年

唐　聖美　『清代閩粤與台灣地區械鬥之比較』　東海大学歴史研究所碩士論文、２００３年